
マザーレスチルドレン

カノウマコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マザーレスチルドレン

【Nコード】

N81230

【作者名】

カノウマコト

【あらすじ】

【デイストピア・暗黒小説】 パラレルワールド近未来、資本主義社会の崩落。ハイパーインフレ、民衆の暴動、放射能汚染。この国の平均寿命は五十歳足らずになっていた。子供の頃に生き別れた母親を探す主人公ハルト。彼の前に現れるマザーレスチルドレン。未来を託す子供たちを守るか：ハルト。デイストピア小説、群像劇

01 廃棄物処理場

「君は何故此処に来た？」

ベッドに横たわったままの老人がハルトに問いかけた。老人と言つても見た目はそんなに年老いた感じはしない、

ただ異様に痩せて肌は荒れてカサカサだが眼光だけは鋭い男だ。

「他にすることもないから」ハルトはそう答えた。

「今は大変な時代だからね。でも多くの若者は政府の生活支援プログラムで遊んで暮らしてるじゃないか」

「別にそれでもいいんですけどね。ただ人を探してるんです。もしかしたらここで会えるかもしれないから」

確かに人間のする仕事じゃないよ。とハルトは思った。老人介護センターの仕事は過酷だった。寝たきりの老人達の食事と排泄の世話。

一日平均十五時間労働。支払われる給料は政府の失業者対策の支援金とさほどの変わりにはなかった。

「誰を探してる？」

「子供の頃に別れた母親を……もうここに運び込まれてもいい年齢になつてるから」

先程の老人に食事を与えると今日の仕事は終わりだった。ハルトが働いているこのセンターは常時約三百五十名の老人を収容している。老人とは言っても施設入居者の平均年齢は四十七歳であった。このセンターは放射能を直接あびて被ばくした者と放射性物質の含まれた食物を食べ続けたせいで内部被ばくした者が入居する施設である。この国の水とあらゆる食べ物には放射性物質が含まれていた。その汚染された食物を食べ続けた人々の余命は通常の場合の半分以

下になると云われていた。放射性物質は毎日の食事として口から入り胃や腸、更に消化吸収されて人体の様々な臓器を少しづつだが確実に破壊していく。現在この国で生きているの国民の直接被ばく者と内部被ばく者を合わせた数は全人口の八割に達していると云われている。その数およそ五千万人。国民の平均寿命は五十歳に満たないとの試算が発表されている。この施設に運び込まれてくるのは、放射能毒に犯されて末期的な症状の死を待っただけの人たちだ。彼らはこの施設で積極的な治療を受けるわけではない。死ぬまでの残り僅かな時間をただここで過ごしているだけだった。町外れの小高い丘に立っているこの施設「丘の上ホーム」は別名、廃棄物処理場と呼ばれていた。

02 連続女性絞殺事件

「ハルトくん。今帰り？」センターの玄関でセンター長のモリタがハルトを呼び止めた。

「はい、今終わったところです」

「今日は女の人が五名緊急搬入されたけど、知ってた？」ロビーを歩いてハルトに近づきながらモリタは言った。

「はい、確認しました。けど違ってました」ハルトは床に視線を落とす。

「そうか、でもまだまだ高濃度放射線管理区域に取り残された人は数万人いるらしいよ」

「らしいですね」

「はつきりとした人数は政府も把握してないらしいから、実際はその数倍いる可能性も高いって救急隊員から今日聞いたよ」

「そうですか」

「政府のいうことは信用できない、まだ相当の数の人たちがまだあつち側で暮らしてるよ」

「でもあきらめないで希望もって。お母さんに、早く会えるといいね」

「はい、ありがとうございます」

待合ロビーのソファに座って数人の患者がテレビを観ている。テレビのニュースでは、最近この地区で起こってる連続女性絞殺事件の続報が放送されていた。

先月からの一ヶ月間に女性が夜道で襲われ殺されるという事件が三件連続して発生している。

手口は皆同じで首をひも状のもので締めて絞殺され、死体には三人とも乱暴された形跡があったと女のキャスターが伝えている。

「同じ女性として決して犯人をゆるすことができません」と彼女は締めくくった。

「たぶん変質者の仕業だろうけど、物騒な世の中だ」テレビから目を離しモリタは顔をしかめていった。

「ええ」ハルトも顔を曇らす。

「あ、引き止めて悪かった。じゃあ、気をつけて」

「はい、お先に失礼します」

ハルトはモリタに挨拶をして上履きからスニーカーに履き替える
と玄関を後にした。

今夜は風はなくひどく蒸し暑い夜だった。空は月もなく曇っていた。

センターの建物を出るとハルトは駐車場に停めてあった小型の電動バイクにまたがった。

ヘルメットをつけて左腕につけた腕時計の有機液晶のパネルを見た。

緑色の発光ポリマーの光が西暦二千十五年、七月十八日、午後七時二十分を表示している。

今夜は行きつけの食堂で食事をするつもりだった。

03 東和食堂

「いらっしやい……。おおー久しぶりだねえ」

仏頂面で仕込みをしていたマスター、ハルトの顔を見ると笑顔になった。

「どう、調子は？」カウンターの中の椅子に腰掛けてマスターはいった。

「別にな変わった事はないよ。マスターの方はどう、忙しい？」

この居住区の中心部に当たる東和町にある東和食堂、ハルトはこの店の常連だった。店のカウンター席の一番奥に腰掛けながらハルトは携帯電話を取り出した。

携帯電話には着信の履歴も新着メールの表示もなかった。

「相変わらず暇よ、今日はハルが初めてのお客。そろそろこの店も潮時かな」

マスターは頭巻いたバンダナをとりながら立ち上がった。

「最近ご無沙汰だったけど元気にしてたの？うちの嫁さんも心配してたよ」

「うん、最近なんだか疲れ気味で何をするにも億劫になっちゃってね。何かやっぱ少しづつ内臓が腐ってきてるのかな」

「あはは、ハルはまだ若いから大丈夫だと思うよ、オレはもう歳だからあちこちガタが来てるはずだけどね。でも全然大丈夫よ。元気元気」

「マスターは、子供たちの為にまだまだがんばらなきゃね。ところでレイコさんは元気にしてるの？」

「最近蒸し暑いからね。実はオレもちょっとダルくて参ってるよ。レイコは元気にしてるよ。今は子供たちと出かけてる。

リカのクラスの友達の誕生会なんかでユウジも呼ばれてね、一緒に。ほら駅の向こうにでかいマンションあるじゃない、あそこまで」

「大丈夫？ほらあ最近物騒じゃん」

「ああ、連続殺人か……。うん、レイコは大丈夫、強いから。それに二人も子ども連れてちゃあ、さすがに犯人も襲えないよ」

「そうだね」ハルトは笑った。

「リカとユウジともしばらく会ってないね、どうしてる最近は？」

「うん、まあ元気に学校通ってるよ。最近は生意気になってね、二人共。レイコも大変よ。まあ、オレはここで毎晩遊んでるけど」

「そっか、でもマスターは偉いよ。子供育ててるから、二人もね」

「あはは、でもいつ放り出すかわかんないよ。この店ももうヤバイもん、閑古鳥が泣いているよ」

マスターは笑いながらプレイヤーにCDをセットした。

「いつものでいい？」

「うん、いいよ。お腹減ってさ。あ、先にビールね」

「あいよー！」

04 I Shall Be Released

The Bandの演奏するアイ・シャル・ビー・リリーストが壁に埋め込まれたスピーカーから流れてきた。ボーカルの搾り出すようなファルセットが淀んだ店内の空気を僅かに震わせた。

すべてのものは置きかえられるという
でも、すべての距離ははつきりしていない
だからおれはすべての顔を覚えている
おれをここに置いたすべての人の顔を
おれの光が輝いているのがみえる
西から東へ もういつでも、もういつでも
おれは解き放たれるだろう

この国は今から二十年前の西暦一九九五年に破綻した。
それは小さな経済新興国の破綻が発端だった。しかしそれをきっ
かけしてに世界経済のバランスが崩れ、先進国と言われていた殆ど
の国が連鎖的に債務不履行に陥ってしまった。
行き過ぎた市場原理主義、資本主義社会の崩壊だった。各国の株
価は地に落ち、主要通貨は暴落し紙くず同然になった。
過去最大級の世界恐慌、あらゆる国で失業者が溢れかえり凄まじ
いインフレが起こった。

主要各国はブロック経済体制をとり再び世界経済は分断された。

それは資源がなく工業製品の輸出に頼ったこの国の経済にとって大きなダメージとなった。

主要国はこの国の高品質で高価な製品を買い取る経済力を失ってしまった。もうこの国の世界に対する経済的影響力はゼロに等しいと云えた。

完全失業率四十五パーセント、食料自給率五パーセント。

そして最悪のシナリオが待っていた。経済ショックが世界を震撼させた翌年、今度は食料パニックが発生した。

この時より数年前に締結された世界協定により関税は撤廃されていた。

自国の工業製品を海外により安価に輸出し有利な貿易を行う事と引き換えにこの国は食料自給へ回帰する道を捨てたのだ。

あらゆる農作物、海産物、畜産物は近隣諸国から安価で輸入された。その事によってこの国の農業および漁業、畜産業、その他、第一次産業のほとんどは消滅して行った。

この年世界的な異常気象の影響で農作物への被害が相次ぎ、穀物相場は急上昇、同時に家畜パンデミックの大流行で各国の家畜数は激減した。こうして世界的な食糧不足時代に突入していったのだ。

急遽全ての食料輸出は自国民の食料を確保するために極端な輸出規制を行った。

外国に売る食料なんて存在しなくなったのだった。

食料自給率が異常に低いこの国はたちまちかつて無いほどの食糧難に見舞われた。

この国はあっけなく崩れ落ちた。

飢えて死んでゆく人の山また山。民衆は政府に対する不満を爆発

させた。

市民の食糧配給に対する抗議デモは次第に大きな運動となっていた。それはやがて暴動となり国中を巻き込んで拡大した。国内各地で荒れ狂う暴徒。当時の政府は暴徒を鎮圧するために強硬手段を投じ軍隊を派兵した。戒厳令がしかれた。

多くの民衆の血が流れた。それでも食料に飢えた人々は当時の政府と戦った。

この攻撃に対し軍の一部が反乱を開始した。軍隊の幹部によるクーデター勃発、そして強大な反体制組織が生まれた。革命戦争の始まりだった。

戦いは日を追うごとに激しさを増していった。

そしてテロリズムも横行した、狂ったテロリスト集団が混乱に乗り国内の主要原子力発電所を同時多発的に爆破したのだ。

原発依存度の高かった大都市への送電は瞬時にストップしこの国は暗闇に包まれた。そして最悪なことに数基の原子炉が制御不能に陥り炉心が融解爆発した。この事で原子炉内の放射性物質が大気中に大量に放出された。当初、政府は住民のパニックや機密漏洩を恐れ、放射能漏れの事実を公表しなかった。また、付近住民の避難措置なども取られなかったため、多くの人々が甚大な量の放射線をまともに浴びることになった。高濃度の放射性物質で汚染された土地は居住が不可能になり、数百万人が移住を余儀なくされた。首都を含め主要都市は壊滅状態となった。

政府軍も同盟国の協力を得てテロリズムに徹底的なよる報復を…しかし全ては遅すぎた。パンドラの箱は開けられた後だった。

五年続いた泥沼の内戦が終わると、勝利した革命軍の若きリーダーが新政府を立ち上げた。

開戦時一億二千万人いた人口は革命終了後には半減してしまった。

なんとか残された六千万人は新時代の幕開けを迎えることが出来た。
希望に満ちた新しい時代が訪れると誰もが信じていた。

しかし実際にはそうはいかなかった。漏れ出した放射能はこの国
を覆い尽くしていた。

そして世界はこの国を見捨てた……。

05 ドブネズミ料理？

「いただきます！」ハルトは運ばれた料理に箸をつけた。一応肉料理だが何の肉かはわからない。

マスターだって多分知らないはずだ。どっかの業者がドブネズミを繁殖させて食肉用として闇で売りさばいているという専らの噂だった。

でもハルトはマスターが作ってくれるこの料理が大好きだった。今の子供達は家庭では完全食と言われるドッグフードみたいなまがいクッキーと何種類かのサプリメント、人工ミルクだけしか与えられていない。有害物質の入っていない安全な食べ物なのだが味気なくてハルトは可哀そうに思ってしまう。

でも子供たちの健康を維持していく為にはそうするしかなかった。「やっぱりマスターの料理は上手いよ」ハルトはお世辞じゃなくそういった。

「うれしーね、そう言ってもらえると。でもね、材料がまた高くなつてね。この値段でいつまで出せるかわからないよ」

マスターは最初笑って次に暗い顔になった。

肉を頬張りながらグラスに注がれたよく冷えたビールを飲む。みんなはビールと呼んでいるがこの泡立った液体は国産トウモロコシで造られている。アルコール度数は割と高いが本物のビールとは多分程遠いものだろう。ハルトは本物のビールを飲んだことがなかった。

「やっぱり子供たちは安全食しか食べさせてないの？」

「うん、たまにはオレの料理食べさせてやりたいけど、レイコのやつが絶対許さないからな」

「そか、でも仕方ないね。かわいそうだけど」

「そうそうドッグフードだけ食べて育つ犬みたいでな、オレは絶対嫌だな。でも子供たちの前ではそんな事いうなって、レイコが」

「そりゃそうだよ、子供たちだって好きであんなドッグ……。いや安全食食べてるわけじゃないし」

「うん……。好きなもん食べないってよな。辛いだろうな、育ち盛りだっていうのに」

「でもまあ、二十年前の食糧難は酷かったからな。あの時に比べれば今のガキは幸せだよ、ハルも生まれてなかったから知らないだろ」
「うん」

「あの頃、オレはまだ高校生だったし一番腹減る頃じゃん。部活行つてたし。地獄だったな……。思い出してもゾツとする」

「いきなりきたの？ 食糧不足」

「そうそう、いきなり。あつという間にスーパーから食べもんがなくなつた」

「へえ」

「それまでは普通になんでもあつたんよ。何でも食えた。カレーにラーメンだろ、牛丼、回転寿司。ハンバーガーだろ。それにフライドチキンだろ。」

スパゲッティにたこ焼き。お好み焼きに……。夢中になって喋るマスター。

「もういいって、マスター」ハルが手を振って制止する。

「おお、ごめん興奮した。まあ、本当に普通にみんながそんなの食つてたの。今思うと夢のようだろ」

「うん、オレの給料じゃ食べないよ、そんな高級料理」ハルがため息をつく。

「まあな、オレも食べないよ。政府発行のフードスタンプじゃ無理だ。まあタコ焼きくらいは食えるけどな」マスターは笑った。

06 最悪の世界恐慌

「それでさあ、いきなり世界恐慌、あつという間に異常気象と家畜病流行で食料難がきて、食べ物が消えた」

「うん」

「地獄だった、人間食えないっていうのが一番こたえるな、そこら辺に生えてる草は全部食ったよ。そして犬や猫も食った。酷いだろ、でも仕方なかったんだ。生きていくためには」

「そうなんだ……」

「うん、食べ物がなくなって、食べもん取り合いで殺し合いもしょうちゅう起こってた」

「……」

「だからさあ、今の方がましなの。確かに今だつてろくに仕事もないけど、今の政府は国民の最低限の生活は保証してくれてる。低所得者にはフードスタンプ。

就職難で就労できない若者には支援金、それ以外の失業者や年寄りや病人には失業手当とベーシックインカム（基本所得保障）。

一応ギリギリの生活だけど飢え死にすることはなくなった」

「そうだね、ましかな……」

「そうそう、世界恐慌の頃、前の政府はさ、膨れ上がる失業者対策として何の社会保障も提案できなかった。だからあの頃は自殺者が一気に増えたんだ」

「うん、でもね。ホームで働いてると毎日死んでいくじゃん、入居者がさ。これでいいのかなって思うよ。人の一生ってなんなのかなって……」

「放射性物質……ハルは毎日死んでいく人見ってから……。貧乏人は安全な食品なんて高くて食えないし、わかんなくなるよな、確かに」

「かと言って、安全な輸入食品は俺たち貧乏人には高嶺の花だ」

「うん、リカやユウジが大人になる頃って……どうなってるんだろ
うな、良くなってるって思うマスター？」ハルはマスターに尋ねる。
「そりゃあ……。あいつらは健康だし俺達と違って長生きもできる。
でも今後この国の状況が良くなるのは考えにくいな」

「だね」

「だからアイツらは頑張って勉強してもらって将来は友愛党員にな
ってもらえないかって思ってるよ、オレもレイコも」

「友愛党かあ……」ハルは天井を見上げた。

「でも部活終わってさあ、腹減ってて、帰り道のコンビニでお湯も
らって作った食ったカップラーメン。あれが一番かな、うまかった
思い出でいうと」

しばらくの沈黙の後、マスターがしみじみといった。

「まだ言ってるの」二人は爆笑した。

07 隔離地区

「ところでどう、お袋さん見つかりそう?」

「うん…… なかなか難しいよ。手掛かりが無いから」

「そうねえ、別れてからずいぶん経ってるから……顔だって変わってるだろうしね。ハルだってもう子供の頃とは全然違ってるだろうからね」

「うん、そだね。もうだんだん記憶が曖昧になってきてるんだ……」

「やっぱり、まだ隔離地区にいると思う?」

「うん、昔あつち側に住んでたからね」

「そか、あそこじゃあ、俺達は自由に行き来はできないからね」

「もう死んでいるかもね、もし生きていたとしてもはそんなに長くはないだろうし」

「そんなことないよ! 絶対どっかで生きてるって、きっとお袋さんもハルに会いたがってるよ」

「だといけど」

「……でもさあ、なんでお袋さん、ハル残していなくなっちゃったんだらうな?」

「……」ハルトは無言で目を伏せる。

「ごめん、ハル」

「いや、いいよ」

「あの頃はまだ革命の後のどさくさで大変だったもんな、きっとハルのお袋さんもいろいろなさ事情があつて、ハルを安全な児童施設に預けたんだらうな」

「うん……」

08 カジさん

入り口のドアが勢い良く開かれて一人の男が転がるように入ってきた。大きな黒いシヨルダーバッグを肩にかけた四十を少しこえたくらいに見える中年だった。

ハンチング帽を被ってヨレヨレの半袖シャツにかなり汚れが目立つジーンズを履いていた。すでにかなり酔っているようだった。

「また来たよー」

「いらつしゃ…… なんだカジさんか」

「悪かったね、マスターオレで」

カジさんと呼ばれた男はおぼつかない足取りで三席あるテーブル席の一番入口に近い椅子にドカツと腰を下ろした。

「またかなり出来上がって 一体どこで飲んできたんですか？ 今日早めに帰ってくださいよね」

迷惑顔でマスターは言った。

「うんうん、分かってるよ。昨日は悪かったね。朝まで付きあわせて」

「そうですね、オレも随分酔っ払ってたけどあの後でレイコと大喧嘩だったんだから」

「すまんすまん、今夜は少しだけ飲んだらすぐに帰るからさ」

「もう、カジさんはかなり酒癖悪いんですからね、昨日も絡みまくってましたよ。覚えて無いでしょうけど」

「分かってる、分かってるって、マスター、じゃ、とりあえずビールね」

「あいよ」

マスターは冷蔵庫から瓶ビールを取り出すと慣れた手つきで栓を抜き、グラスと一緒にカジさんの座るテーブルに置いた。

カジさんは手酌でビールをグラスに注ぐとその泡立って不自然に黄色い液体を一気に飲み干した。

「ふううー、仕事が終わつての酒はやっぱ最高に旨いね」

「よく言うよ、仕事なんてしてないくせに」

マスターは苦笑いしながら呟いた。

「聞こえますよ、カジさんに」

ハルトが心配してマスターに小声でいった。

「あー、ハルちゃんいたの、わかんなかったよ。そんな隅っこにいるから。大丈夫ちゃんと聞こえてから。オレはねえ昔から耳はいいのよ。」

だつてさあ、昔ミュージシャンやってたから。まあ、今でも現役のバンドマンだからね」

カジは大声でハルトに話しかける。

「ハルちゃん、オレはねえ、ちゃんと仕事してるよ。そうだ今やってる仕事のお金入ったらさ、ハルちゃんを寿司屋に連れていってやるよ。」

旨いよ、寿司は。こんなしけた店のわけの分からない食い物と違ってさ」

「悪かったね、カジさん。わけの分かんない料理で。ウチの唐揚げは人気メニユーなんだよ！」

「そうだよ、カジさんこの唐揚げ定食、最高にうまいよ、食べたことないの？」ハルトが言った。

「けっ、そんな何の肉使ってるかわかんない唐揚げなんて食べたもんじゃないよ、ハルちゃん」

「でも、マスターの作った唐揚げサクサクしてマジでおいしいよ」

「ドブネズミの肉じゃねえの？噂じゃあ……」

「カジさん！ そんなこと言っているとまた出入り禁止にしますからね、ウチのはれっきとした鶏の唐揚げ！」

マスターは、苛立たしそうにそう言った。

「わかつたつて、マスター。ちゃんとマスターも連れて行くから、寿司屋」

カジは少し焦った様子で言った。

「いいよ、オレは行かない。行きたくないもん。重油と水銀まみれの海で捕れた放射能汚染したサカナで握った寿司なんか食べたもんじゃないし」

「分かった、じゃあハルちゃんと二人で行くわ」

「勝手にして下さい。っていうか、カジさん仕事して無いじゃん」

「失礼な！マスターよお、オレは建築家だぜえ、それも超一流の。」

「一級より上、言うなら特級建築士だぜ。仕事のオファーは腐るほどくるけど気が向かない仕事は一切受けない主義なの。安売りはしないんだよ」

カジは得意げにまくし立てた。

「またその話かよ。フレンドシップスクエアはカジさんの設計でしたね。聴き飽きましたよ、いい加減。うちのツケも払えないくせによくいうよ」

マスターは呆れた様子で嫌味を言った。

09 ヤマサキ先生

「まあまあ二人とも、もういいじゃないですか、やめましょうよいい加減で」

ハルトが仲裁に入った。

マスターはまだ不機嫌そうで、カウンターの奥の椅子に腰をおろすと前掛けのポケットから煙草を一本取り出して口に咥えると棚においてあったオイルライターで火を着けた。

「あれ、マスター煙草止めてたんじゃなかったっけ？」

ハルトが言うと、マスターは不味そうに煙を吐き出しながら、「ああ、また禁煙失敗。仕方ねえな、オレ意志が弱いからさ。大体さあ、健康のための禁煙なんて意味無いじゃん。俺達はどうせ長生きなんてできないんだから」

「でも子供たちのために少しでも長く生きていたって言ってたじゃない。マスターもレイコさんも」

「まあ、そうなんだけど。いろいろあるんよ生きてるとき。ストレスっていうか」

マスターは灰皿に視線を落としてそう言った。

そして何気なくカウンターの横の小窓から外を眺めた。

「げ、あいつらまた来てるよ」

「昨日いたガキどもか？」

カジが身を乗り出して言った。

「昨日なんかあったの？」

ハルトが尋ねた。

「うん、ちよつとハルもこつち来て見てみなよ。気味悪いから」

表の通りで街灯の下、改造を施された大型の電動バイクに股がっただアミー服に身を包んだ数人の少年達がいた。先頭で大きめの黒いサングラスを掛けた少年が静かにこちらを窺っていた。

「昨晚もあんな感じであそこで集まっただんだ。ねえ、カジさん」
「うん、マザーレスチルドレンとかホームレスチルドレンとか言われてる奴らだよ。親に虐待受けた可哀そうな連中なんだろうけど、あちこちで悪さしてるらしいよ」

カジが顔をしかめながら話した。

「マスター、一応黒服隊に通報したほうがいいんじゃない？」

ハルトが心配そうに言うと、

「でもあいつらまだ何もしたわけじゃないし、ただ集まってああやってるだけだしね、今のところ」

黒服隊とは、現政府の下に配置された武装行動隊の俗称であり旧体制の警察と自衛隊の役割を統括再編した組織である。

主に国や地域の治安の向上を目的に編成された部隊で正式な名称は国防義勇軍といった。

しかし真黒の軍服で街を闊歩する姿は常に威圧的であり、今では陸海空軍と並ぶ第四の軍隊と云われていた。

「それに黒服の連中はあてにならないよ、通報してもまともに来た試しがないし最近では通報の電話にも出ないらしいよ。」

奴ら交通違反との闇市の取締には躍起になるくせに、俺たち善良な市民が困ってる時には見て見ぬふりだよ」

マスターは吐き捨てるようにそう言った。

その時、ドンっと大きな音がして店の奥にあるトイレのドアが勢い良く開いた。

「あーあ、まざーれすちるどれんはさああ。あいつら子供さらさらしいよあ」

ハルト達三人は一斉に振り返った。

「先生いたんですか！」
ハルトとカジは声を揃えて叫んだ。

10 役立たずの黒服

その男はヤマサキという年齢不詳の男で、でっぷり太った体躯に顔は色白で丸々と膨れ上がり西遊記に出て来る豚の怪物を連想させた。

先生というのはいわゆるニツクネームみたいなもので、実際に何の先生なのか知る者は誰もいなかった。この店、東和食堂の常連の一人だった。

「ああ、すっかり忘れてた、先生はさあ、夕方きて、すぐにトイレに入ったきりだった、そろそろ三時間になるよ」

笑いながらマスターは言った。

「ヤマサキ先生、三時間もトイレの中で何やってたんですか？」
カジが言うと、

「うん、ボクは…… ちょっと、しえいくすぴあの四大悲劇が……
何だったか急に思い出せなくなって…… このトイレ借りて考えていたんだよお」

ヤマサキは、遅回しでレコーダーを再生しているような喋り方でそういった。

「三時間も？ ずーっと？」

「うん」

ヤマサキは、頷くと、ニヤニヤと微笑みながら大きな金縁メガネを掛け直した。そして

真夏だというのに何故か着込んでいるステンカラーコートの際を正した。

「まざーれすちるどれんは、さあ、汚染していない子供の臓器を闇ルートに売りさばいてるんよ」

ヤマサキはポケットから携帯電話を取り出すとディスプレイに表示されたネットニュースをハルトに見せた。

「マジかよ！先生、じゃあ外の奴らここの子供たち狙ってるのかよ！」

カジが声を荒らげた。

「どうやら先生の言うことは間違いないみたいだ……」

ハルトは、携帯電話の画面から目を上げてマスターのほうを見た。
「マジかよ、ハル。やばいじゃん、うちの子供らが狙われてるってこと？」

「多分間違いない」ハルトが言った。

「冗談じゃない、リカ達を殺されてたまるか！」

マスターは虚空に向かって叫んだ。

「マスター、レイコさん達そろそろ戻る頃じゃない？」

ハルトが言うとマスターは青ざめた顔で

「そうだな、取りあえず黒服に電話だな」

そう言つとハルトから取り上げた携帯電話で9629番に電話した。

数回の呼び出し音の後、無常にも回線は一方的に切られてしまった。

「くそっ！ 役立たずの黒服が！」

Chapter 01 END

11 ケンイチ

ケンイチは母親達による虐待を受けて育った。物どころがついた時からまともな食事は与えてもらえなかった。

一日の食事がカップ麺一個というのが日常的だった。いや何も食べられない日が一週間のうちに何日があった。

五歳になったケンイチは本当の父親を見たことがなかったが、母親が連れてくる何人かの男達によって絶えず暴力だけは与え続けられた。

男達は理由もなくケンイチを殴った。パチンコに負けた腹いせに横腹を加減なく蹴りあげられる事もしばしばだった。

古くて日当たりの悪い二階建てのアパートの一階の角部屋が親子の住み家だった。

母親は無職だったが親子は母子家庭に政府が支給する生活保護費で生活していた。

母親にとってケンイチはその保護費を受け取る為だけの存在に過ぎなかった。

男が泊まっていく夜には母親はいつもケンイチの両手両足をナイロンの紐で縛ると体ごとケンイチを洗濯機の中に押し込んだ。

彼は蓋を閉じられた洗濯機の中で首まで水に浸かりながら一晩過ごした。母親はケンイチ一人を残して平気で、二、三日帰ってこない時もあった。

そんな時は隣に住んでいる醜く太って精神を病んだ女がケンイチに手料理を食べさせた。

代わりにケンイチはその女の妄想話を延々と聞かされた。それだけが彼が口にするまともな食事だった。

ケンイチは小学校に通うようになったが、先生や同級生とは一言も口を聞くことはなかった。

誰もケンイチが言葉を話さず姿を見たことがなかったし、クラスの

子供達に至ってはケンイチは口が聞けないものだと思っていた。

それにケンイチの両腕の内側にある煙草を押し付けられて出来た無数の火傷の痕を気味悪がって誰もケンイチに近づく者はいなかった。

もちろん友達はいなかったし、いつも一人で遊んでいた。ケンイチは給食だけが楽しみだった。

学校に行けばトウモロコシで出来たパンと人工牛乳だけは必ず給食として食べることができた。

ケンイチはまずくてみんなが食べ残したパンをこっそりカバンの中に隠して持ち帰った。

相変わらず母親からまともな食事を与えられる事はなかったが、彼は盗んだ給食のコーンブレッドのおかげでお腹を空かす日々から抜け出すことが出来た。

12 金魚

ケンイチが十二歳になった小学校最後の冬休みにそれは起こった。その頃になると学校が休みに入って給食が無い日などは彼は近くのスーパーで食料品を万引きして飢えを凌ぐことを覚えていた。

その冬初めて雪が降った十二月のある寒い日、母親は昼過ぎに起きると男と出かけたまま夜になっても帰ってこなかった。

ケンイチはスーパーで万引きしたクッキーを食べながらいつものようにテレビを見ていた。

テレビでは黒い軍服をきた小柄な男の熱のこもった演説が一時間以上続いていた。

まだ若いテレビの画面越しにも強烈な存在感を放っている小男、この国の首相だった。

ケンイチは退屈してテレビのチャンネルを変えてみたが放送がやっているのはこのチャンネルだけだった。

ケンイチはテレビを消すと風呂場に向かった。浴室の棚には母親が飼っている金魚の小さな水槽があった。

ガラスのケースの中で一匹の金魚がゆらゆらと泳いでいた。母親が可愛がってる金魚だった。金魚は美しかった。

ケンイチは母親に隠れてこの赤くて綺麗な金魚を眺めるのが好きだった。ケンイチは手に持っていたクッキーのカスを金魚の上にパラパラと落としてみた。

クッキーのカスは水面に落ちるとゆっくりと水槽の底に沈んでいた。金魚は腹が膨れているのかそれには見向きもしなかった。

ケンイチは無性に腹がたった。今度は一欠片のクッキーを水槽に落としてみた。金魚はするりとそれを避けた。

ケンイチは金魚に殺意を覚えた。ケンイチは水槽の中に手を突っ込むと金魚をつまみ出した。彼の右手の中で金魚はピクピクと蠢いた。

ケンイチは思いきり右手を握りしめた。体中に電気が走ったような感じがした。頭がしびれて足の感覚がなかった。

頭のしびれはだんだんと快感に変化していった。ケンイチは初めて射精をした。

こわごわ握り締めていた手を開くと金魚は無残に潰れていた。

ケンイチは金魚の死体をトイレに流すと、いつも寝ている奥の部屋の布団の中に潜り込んだ。

体の感覚はまだおかしかったが頭はすっかりしていた。

金魚を殺してしまったことを母親に知られたら間違いない殺されるだろうとケンイチは確信した。

13 初雪が積もった街

明け方近くになって母親は男と一緒に帰ってきた。

泥酔状態の母親を残して男はすぐに出て行った。

寝たフリをしていたケンイチは起きだしてきてリビングルームで酔いつぶれている母親を見下ろしていた。

ケンイチは用意していた電気コードを母親の首に入念に三回巻きつけた。それでも母親はだらしなく横たわったままだった。

ケンイチは床に尻をつけると電気コードの両端をしっかりと握りしめた。そのままの姿勢で両足を母親の肩に乗せて固定した。

足を踏ん張ると同時にコードの両端を渾身の力で引き上げた。さすがに母親も目を覚まして激しく暴れたがケンイチはさらに力を込めた。

長い時間のような気もしたが、あっと言う間の事のようにも思えた。母親はがくがくと痙攣した後動かなくなった。ケンイチは二度目の射精をした。

母親の死顔を見てると可哀そうになった。でも悲しくはなかった。母親のことが大好きだったという事が初めて分かった気がしたが今更どうすることも出来なかったし、殺す前にそれに気付いたとしても同じ事だっただろうと思った。

ケンイチは家を出た。初雪が積もった街はやけに眩しかった。

Chapter 02 END

14 お誕生日会

「じゃーねー、ユイちゃんまたねー！」

「またねー、リカちゃん、ユウジくん」ユイがリカとユウジに手を振る。

「バイバイ、ユイちゃん、またテトリスやろうね！」

「うん、ユウジ君、絶対やろうね」

「今日は、子供たちがすっかりお世話になってすみません。それにこんな素敵なお土産までいただいて」

リカのクラスメートのユイの誕生会の帰り際、レイコはナカシマ家の玄関先で頭を下げた。

土産に買ったのは、瓶詰めのカヤビアと外国の有名店のものだというマカロン。ナカシマ夫人が有名服飾ブランドの紙袋に入れて持たせてくれた。

カヤビアなんて食べたことがない。

マカロンはさつき紅茶と一緒に出たので初めて食べたけど美味しかった。

この世にこんな甘くて美味しいものがあるなんて。

レイコは驚きと悲しみが混ざった気持ちになった。

こんなに美味しい物を毎日食べてるなんて。許せない。

次にレイコは怒りを覚えた。

「本当にすみません、こんな高価なものを……」

レイコはまた頭を下げる、そして自分の履いているスニーカーを見つめた。それは履き古してもうぼろぼろだった。涙が出そうになった。惨めだった。

「ああ、いーのよ。気にしなくて。それより今度主人と一緒にお店にお邪魔するわね」

見送りに出たナカシマ夫人がレイコ達に微笑む。

「オタクのお店の唐揚げ定食すごく美味しって評判だから、ねえ」
「うん、一回食べておかないとって、いつも二人で話してるんですよ」

隣に立つユイの父親、ナカシマが言った。

「あはは、そんなあ、評判だなんて。あんな定食、お口には合いませんよ」

社交辞令。ウチの定食なんて食べる気なくせに。心の中でレイコはつぶやいた。

噂には聞いていたがナカシマ家の暮らしぶりは、レイコの想像以上だった。

友愛党員の議員宿舎。外見は普通のマンションだったが、一步玄関の中に入った時からレイコは目を見張った。

豪華な調度品の数々。最新の家電製品、婦人の華やかな服装。

そして何よりレイコを驚かせたのがナカシマ家の贅沢な食生活だった。

こんな時代だっていうのに、あんな贅沢な食材一体どこから入るんだろう。

私たちは毎日売れ残った食堂の料理を食べて、その食べ物は汚染されている。子供たちは政府配給の安全だけど味気のない食事。

それに比べて、この人達は安全な上に信じられないようなおいしいものを毎日食べて暮らしている……。そして健康で寿命だって全うして生きていくだろう。

レイコはあまりの理不尽さに涙がにじんだ。

ユイの父親ナカシマは、友愛党の幹部でこのネオシティ第一七居住区の区議会議員だ。この国は過去十五年間、友愛党という政党の一党独裁政権下にある。

友愛党総裁はカモガミといい十五年間の長きに渡り政権を維持しているこの国の最高指導者である。カモガミは革命戦争の時の功労者だった。

当初カモガミの総裁就任時、報復攻撃があると分かっていたながら首都に先制攻撃を行った事で一部では痛烈な批判を浴びていた。

しかしカモガミは最高指導者の地位に就任してまず、食料の安定供給、失業者への社会保障の確立などの政策を積極的に行なった。

この政策は当時、世界恐慌による凄まじい就職難と未曾有の食糧難に痛めつけられた国民に絶大なる拍手喝采を持って受け入れられた。

カモガミはその後も卓越した政治手腕を発揮しこの国の復興に尽力すると、いつしかこの国の歴代指導者の中でも最高の指導者だとの呼び声も聞こえてくるほどになった。

カモガミは法律を変え大統領と首相を統合した「総統」職を新設して自らそのポストにつき、国民投票で是非を問うた。賛成票は九十パーセントにのぼった。

こうしてカモガミ総統と友愛党の輝かしい時代が誕生したのだ。

絶大なる国民の支持によって誕生した友愛党政権だが、友愛党の政策は時代が進むにつれて友愛党党员優先の差別的階級制度にシフトしていった。

友愛党の党员であるということはいつしか富の象徴となり、党员の暮らしは栄華を誇った。

この事で一般の貧しい国民は友愛党政治に対して強い不満と不信感を抱くようになっていくのだった。

友愛党员はこの国のエリートであつてこの国の社会のあらゆる分野、行政、立法、司法、軍、大衆組織におけるまで指導牽引していた。

友愛党员に成るためには厳格な審査があり一般の人は簡単にはなれない。基本理念は民主的かつ文明的な国を建設する事とされたが、実際は極端な階級社会を形成していた。

友愛党员は、特権階級あつかいであらゆる面で優遇された。例えば、海外から輸入された安全で贅沢な食料品が優先的に党员に配給される事などである。

特にそのことは、いまだに続く慢性的な食糧不足で未だ危険な食べ物にしかありつけない庶民たちの強い反感を買っていた。

この国で健康的に長生きするためには僅かに輸入される安全な食物だけを摂取していくしかないのである。

それは一部の世界的大企業に務める家庭か友愛党员にしか許されてはいないのであった。

着信音がなった。

「失礼」ナカジマはストラックスのポケットから携帯電話をとりだし電話に出る。

「ああ、私だ。待ってくれ」

「すみません。仕事の電話です。ちょっと失礼します」ナカジマは

通話口をおさえてレイコに目礼すると、奥に消えた。

「こちらこそ、すっかり長居してすみません。二人共ちゃんとお礼を言いなさい！」

「はい、ありがとうございました」

「ございましたー」

15 仁勇会のヨシオカ

「おう、オレだ。例の食堂のガキさらってこい」

「馬鹿野郎！ 今すぐに行け」

「それと、今から一時間だけ黒服は動かねえ。きつちり一時間だ。時間内なら少々派手にやっても構わん」

仁勇会若頭のヨシオカは携帯電話で今夜の標的を支持している。

「しかし、あの先生もひでえなあ、自分の娘の同級生だけ、やるこ
とがえげつない、極道以上だ」

ヨシオカは携帯電話を切ると後部座席にふんぞり返って、運転し
ているヤオ・ミンの背中向かっていう。

ヤオ・ミンは真つ直ぐ前を向き運転に集中している。

「全くひでえ時代になっちまったな……、俺達ヤクザもんは殺し合
いはやるが子供を殺す事はなかったぜ」

ヨシオカはヤオ・ミンの後頭部を睨みつけながらしゃべり続ける。

「ああ、お前の国の奴らは昔から金のためなら平気で女子供も殺る
んだったな、なあヤオ」

ヤオ・ミンは相変わらず無反応だ。車は信号で停まった。

「まったく、お前らの民族には美意識つてもんがない」ヨシオカは
パワーウィンドウのスイッチを押し窓を全開にすると外に向かって
痰を吐き出した。ムツとする外気が車内に入ってきた。

「この車もお前の国で作ってるんだよな。いい車だぜ。調度品とし
てもな。俺は大嫌いだけどな」

ヨシオカは革張りの後部シートを撫で回している。

「ヤオ、お前あ、大体なんでこんなしょぼい馬のクソみたいな堕ち

ぶれた国に来たんだ。お前の祖国は、今や世界一の軍事力と経済力をもつてやがるのに」

「そか、そうだった、お前は変態野郎だったな。それでこの国に来た。変態野郎にとつてはこの国は天国だな」

ヨシオカが声を出して笑う。ヤオ・ミンの肩が揺れる。

「この国の奴らはみんな遊んで暮らしてる。そりゃ働かなくても飯がくえりや、働かねえよな。でもなあ、昔は働きもんだっただぜ、この国の人間は」

「働きすぎで死ぬくらいにな。結婚してガキつくつてまた働いて、ちっぱけな家買ってそれで幸せだつて、笑うなあ」

「今はどいつもこいつも死んだような目してるだろ、働かなくても飯は食える。おまんまの心配はない。でもそれだけ、それ以上はない。そして五十前にくたばるのさ。笑うよな。そんなん受け入れて生きてるつて。馬鹿野郎ばかりだ、この国は」

「この国で、旨いもん腹いっぱい食つて、いい女とやりまくつて長生きしたいなら、友愛党に入るかヤクザもんになるしかないんだぜ」

「究極の二択だ、ウケるよな。どっちがいいか。そりゃあ、友愛党員がいいに決まってるよな。普通。でも簡単にはなれねえ、世襲でなるやつは別だけどな。親が党員つていうのがベスト。途中からなるうとするとなら、よっぽど頭が良くて学者になるか、勉強して医者か弁護士になるか。努力して政府の機関に就職するか。天才的スポーツ選手になるか。なれないつて。そんなの普通よお。だろ？」

ヨシオカはスーツの内ポケットから煙草を一本抜いて口にくわえ、いやらしく輝く金無垢のライターで火を着けた。

「だから、今のガキはヤクザになりたがる。今や人気職業のナンバーワンだ。女たちはヤクザの愛人になりたがる。もてるぜえ、ヤクザは。いい服着て、いい車乗つて、いいもん食つて、いい酒のんで最高の女といいマンションに住む」

「けどこつちも簡単にはなれねえ、やっぱ才能ってやつがあるんですよ。ヤクザにも。まあ馬鹿じゃあなれない。ここは一緒。はなからサラリーマンやってるようなヤツには到底無理、ヤクザは自分で稼がなきゃな、でも今はシノギあげるの楽じゃない。あとは天才的な何かが必要なのだ……、馬鹿でなれず、利口でなれず、中途半端じやなおなれず。それが俠客、つてな、まあいいか……」

ネオシティの街をヨシオ力達を載せた黒い電動高級セダンが走り抜けた。カーラジオから古いジャズが流れている。寂しげなテナーサクスの音。

「しかし今年は暑いよなあ。こんな体裁だけで中身の無い張りぼての街づくりやがるから、あちこちから馬鹿どもが湧いてきて暑苦しくてしょうがねえ」

「みんなくたばりゃいいのになあ……」

「殺したいか？ ヤオ。みんなブツ殺したいか？ この街の奴ら皆殺しにしてくれよ」

16 ゼンタイシユギシヤ?

「ねえーマアマア、ユイちゃんちのバースデーケーキすっごくおいしかったねー」

リカが楽しそうにレイコに話しかけた。レイコ達親子は、月のない夜道を三人並んで家路を急いでいた。

リカは今年十歳になった。最近はずっかり生意気になって、何気ない会話をしてるつもりが時々レイコを驚かせる事を言う。

「そうねえ、本当に美味しかったね」リカの手を握りながらレイコが言った。

「リカ、また食べたいよぉー」

「ユージもたべたい！たべたい！」弟のユージがピョンピョンと跳ねながら叫ぶ。

ユージは七歳。まだまだ幼い。可愛いさかりである。

「はいはい、また来年ね、ユイちゃんのお誕生日に食べれるよ」

「えー、一年なんて待てないよー」

「ユージもまてないー、明日食べたい！」

「もう、二人ともわがまま言うんじゃないやーありません！」

今日はやけに蒸し暑い。空はどんよりと曇っていた。

すっかり長居してしまった。天気予報は夜半に雨になると言っていた。

早く帰らないと、雨に降られたら大変だ。一応傘は持ってはきた、でも放射性物質を多く含んだ雨の中、子供連れで歩くのはまっぴらだった。

「ねー、どうしてユイちゃんのおウチはあんなに美味しいものがある

るの？」

「それはねえ、ユイちゃんのパパは友愛党の幹部だからよ」

「ねー、ユーアイトウっておいしい？カンブってなに？」ユウジがレイコに向かつていった。

レイコは思わず吹き出してしまった。

「ばかだね、ユージは、友愛党は食べ物じゃないってばっ」リカは、ユウジの頭を小突いた。

ユウジは大げさに頭を押させてうずくまった。

「いたいよー、ママー、リカがなぐつたよ」

「んでさあー、あんなケーキとか果物とかお肉とかあったじゃん、あれって毒が入ってないの？」

「うん、ユイちゃんちのは大丈夫だよ」

「でもさあ、うちのお店の料理は毒が入ってるんでしょ？」

「そうよ、だから絶対食べちゃダメ、あなた達は安全クッキーと健康ミルクでいいでしょ」

「だって、まずいんだもん。超まずい」

だから、ユイちゃんちのお誕生会は行きたくなかったんだ。

レイコは、多分こうなるだろうと思っていた。

「でも、お店のお客さんは食べてるよ、パパのお料理」

「あれはねえ、大人にしか出してないからいいのよ。大人はもう体に毒が入っちゃってるからいいの」

「ずるいよー」

「それにカジさんとかヤマサキ先生が食べるだけだし、いいのよ。あの人達ならどうなっても」

レイコは、ちよっと言いすぎてしまった事に気づいたがもう遅か

った。

「じゃあ、さー。ハルちゃんもいいの？」

「うーん、そうだねえ、ハルちゃんには食べてほしくないなあ、ママも」

「ふーん、でもハルちゃんも食べてるよ、それもおいしそうにさ」「うーん……ハルちゃんも、もう子供じゃないから、いいのよ」

ハルトは確か十八歳のはず。もちろん友愛党政府が十年前に施行した児童安全育成法の施行前に生まれている。

児童安全育成法が発令された以降に生まれた子供達には政府が汚染されてない安全な食事を保証している。児童安全育成法とは将来のある子供達の生命を守り我々国民の共有財産として大事に後世に命を繋いでいこう。

という理念に基づき交付された法令でその年に生まれた新生児から授乳時期には母乳は禁止され政府配給の安全な粉ミルクが支給された。

離乳食以降も政府が安全な食べ物を継続して提供してくれる。リカとユウジは学校で給食を食べているがそれは質素だが栄養のバランスが考えられ、安全な食材で作られた食事である。児童安全育成法設立以降に生まれた子供は一応安全世代だと言うことになっている。このまま汚染されてない食事をとり続ければ、八十歳くらいまでは生きれるという厚生保険局の試算が発表されている。

「うちも友愛党にはいるうよ」

「簡単に入れないんだから。だって仕方が無いじゃない、ウチは違うんだから、ユイちゃんとは」

「ねー、ユーアイトウっておいしいの？」ユウジがまた聞いた。

「バカ、友愛党はこの国の政権政党だよ」

「リカ、誰からそんなこと教えてもらったの？」

「ユウタ君だよ、学校で聞いたの」

「もー、ユウタ君と仲良くしないでっていつてるじゃないの」

ユウタは、リカと同じクラスの男の子で少し変わった子である。

まだ小学五年生なのにすごくませた事を話す。

「分かってるよ、そんなに仲良くしてないってば、ただお話しただけ」

「どんな？」

「えーつとねー、ユイちゃんちのパパはゼンタイシユギシヤなんだから、そのゼンタイシユギのせいで私たちは自由をハクダツされてるって、だからすごい悪い人なんだってー」

「リカ今のお話誰かにした？」レイコは立ち止まってリカの肩に手をおいて聞いた。

「ううん、誰にも話したことないよ、今はじめてママに話したんだよ」

「そう、それはよかった……。いい、絶対その話は誰にも言っちゃダメよ！」

「どっしして？」

「そんなこと言っていると黒服さんに連れていかれるからよ！」

17 レイコさんに電話しないと

「マスター、レイコさんに早く電話しないと」

呆然としているマスターにハルトがいった。

「ああ、そうだな、レイコのケイタイに電話してみよう」

マスターは、ヤマサキに携帯を返すと、カウンターの奥に入り自分の携帯電話でレイコに電話した。

「もしもし、オレだよ、今どこにいる？」

「ああ、ごめん、遅くなって。そうねえ、もう少しで駅前。あと十分くらいで帰りつくと思うわ」

「待て、まだ帰ってくるな！」

「どうしたのパパ？ 急に」

「いや、今は理由を話してる暇がない。取りあえず駅で待っていてくれ。すぐに迎えに行くから」

「一体なんなの？ もう、なんだか分かんないけど、了解。じゃあ、駅前の広場の噴水のところで待つてるね」

「わかった、車ですぐに行くから絶対そこを動かさないでくれよ」

マスターは電話を切ると、壁の時計を見上げた。午後九時二四分。
「マスター、オレも一緒に行くよ」

「うん、わかったハル。ごめん悪いけど、付いてきてくれ」

マスターはジーンズの尻のポケットから車のキーを取り出しながら、

「カジさんと先生は留守番たのみます」

「わかったよ、マスター、気をつけて。オレは先生と店番しとくよ、どうせ客来ないだろうけど、ねえ先生？」

「うん、るすばんしとくよ、ちよっとトイレに行ってから」

「またですか？ 先生…… 頼みますよ」

ヤマサキはトイレに入ってしまった。

「じゃあ、ごめんカジさん、すぐに戻るから、棚のボトルは適当に飲んでていいよ」

18 追跡されてる？

「じゃあ、裏口から出るぞ、ハル」

「うん、わかった」

マスターとハルトは、店の裏口から出ると店の裏に駐車してあった古い型のライトバンに乗り込んだ。

「エアコン壊れてっから、ちよつと暑いけど我慢な」

マスターはイグニッションキーを捻ってエンジンを掛けようとするが、セルモーターが弱々しく唸るだけでなかなかエンジンが始動しない。

「くつそー、バッテリーが弱ってるみたいだ、こんな時に限って…、たのむ、掛かってくれ」

ハンドルに頭を付け祈るようにマスターはキーを廻している。四回目にしてやっとエンジンが掛かった。車内に排気音が響いた。

「よし、掛かったぞ」マスターはアクセルを踏み込んで車を発車させた。

ライトバンは後輪を軽くホイールスピンさせながら通りに飛び出した。

「マスター、これガソリン車なの？」

「いや、ディーゼル車、ボロ車だけど仕入れの買出しには重宝するからね」

ハンドルを切りながらマスターが答える。

「それに重油だったら海岸行けばバケツでくみ放題じゃん、燃料代かからないからね」

「流出した重油使ってんの？」

「そつだよ」

ハルトはしきりに後方を気にしてる。

「アイツら気付いたかな」

「どうやら付いて来るみたいだぞ」マスターはルームミラーに映る三台のバイクと一台の黒いワンボックスカーの影を確認した。

「バイクに三人、後ろのワンボックスには何人か乗ってるだろうな」国道の大通りに出るとマスターはスピードを上げた。

「結構大人数みたいだね、何か武器になるものない？」

ハルトが聞く。

「うーん、武器ねえ。あ、そうだ後ろの座席の下に金属バットならあるぞ。日曜日にユウジに野球教えてやるって約束したから乗せてたんだった」

「一応、用意しとくね」ハルトは体を捻って後部座席の足元にある金属バットを取って膝の上に置いた。

「マスター野球やったの？」

「ああ、昔な。結構うまかったんだぜ、四番バッターだった」

「へえ、意外だね」

「そうかあ？ ハルトはやったことないのか、野球？」

「うん……、やったことないなあ」

「じゃあ、今度教えてやるよ。ユウジと一緒に鍛えてやる」

「うん、楽しそうだね」

先頭のバイクには、先程のサングラスの青年が乗っていた。ヘルメットは被らず長髪を風になびかせながら運転する姿はハルトと変わらない位の年齢に見える。

後ろには一五、六歳位のまだ幼さの残る顔立ちの少年が続いている。バイクは三台ともエアロフォルムの体を包みこむようなフルカウルデザイン、外国製の最新型だ。

両輪駆動でホイールベースが長く、寝そべるような姿勢で運転している。モーターは大型のモーターに改造してあるようで甲高いモ

「ター音を辺りに響かせていた。

集団はマスターの運転するライトバンの後ろを一定の距離を保ちながら追走している。

午後九時半の街は全く人氣がなく静まり返っている。この街を中心を縦断して伸びるこの幹線道路はすでに営業中の店舗もなく街灯と疎らに走る車のヘッドライトが交錯するだけだった。

「でもさあ、おかしいよね。昨日からあちこちで子どもがさらわれる事件が起こってるっていうのに、黒服の奴ら何やってるんだらう

……」

「ああ、まるで動いてないみたいだな、テレビのニュースでもやってなかったし」

「自分たちのことは自分で守れってことか」

「ケイタイのニュースだけだ。あれ、もうあのニュース消えてるよ」ハルトが携帯電話を見ながら言った。

「え、おかしいだろ。さっきまで見れたじゃん」

「うん、さっきのページは削除されてる」

「どうなってるんだ全く。さっぱりわかんねえな」

19 駅のロータリー

「パパが迎えに来るの？」リカが不思議そうに聞く。

「そうみたい」

「なんで？お店あるのに」

「わからない」

「あ、パパ来たよ！」リカが指差す。

マスターたちが乗ったライトバンが駅のロータリーに入ってきた。
「あそこ！」ハルトが噴水の前のベンチにレイコ達を見つける。

マスターはレイコたちの前に着きライトバンを急停車させると、
「早く乗るんだ！」と叫ぶ。

「あ、ハルちゃんも一緒だ」ユウジがはしゃぐ。

「どうしたの。血相変えて」

「何でもいいから、早く！」

レイコと子供たちはあわてて後部座席に乗り込んだ。

ラッシュの時間が過ぎた駅の構内は、家路を急ぐ人たちが数人いる
だけで閑散としていた。

追跡してきた集団もロータリーに着くとライトバンを取り囲むよ
うに停車した。

ライトバンの前後に少年二人のバイクが停まり、ワンボックスカ
ーは後方に少し距離を置いて停車している。

「どうするマスター？」

「うん、奴らもここじゃあ手が出せないだろ」

「一体なんなの……」レイコが怯えた様子でいう。

「わからん、でも心配ない」

子供たちも、ただならぬ様子を感じてじっと黙っている。

サングラスの男のバイクがライトバンのすぐ脇に停まった。

「一体、俺達に何の用があるんだ！」

マスターは運転席の窓からサングラスの男に向かって叫んだ。

サングラスの男はバイクに股がったまま、黙って、静かにマスターを見下ろしている。

「ヒラヤマの兄貴何やってるんだろ、早くさらっちゃえばいいのに」
ワンボックスカーの助手席、少女が退屈そうに前方のやりとりを
見ている。

「うるさい、エミコは黙ってる」

運転席の青年が言う。

「ああいう仲のいい家族見るとムカつく」エミコがいう。

「お前も相当親にやられたのか？」

「うん、ウチの親は最低だったよ、二人ともギャクタイ親、うちら
はみんなそうじゃない？ユキオは違うの？」

「俺んところは実はそうでもない。お袋の事は嫌いじゃなかった」

「そう、可愛がられて育ったんだ？」

「そんなわけ無いだろ、ただ嫌いじゃないだけだ」

「じゃあ、なんでこんな事やってんの？」

「そりゃあ、俺は頭良くないし真面目にやってもろくな人生になら
ないからに決まってるだろ」

「それでヤクザになっていい暮らしがしたいわけ？甘いわ、そんな
ん」

「うるさい、黙れ！」

「ヒラヤマの兄貴ってユキオも言うけど、年変わんないでしょ？」

「うるさい、アニキは兄貴だ！」

「尊敬してんだ？ヒラヤマの事」

「呼び捨てにするな」

「ヒラヤマに犯れたんだ……」

「いつだ？」

「三日前の夜、マーキーのトイレで、ヒラヤマかなりガンジャと酒

で出来上がってて、無理やり」

「……」

「殺されるかと思ったよ、酷く殴られて、首絞められて腕に噛み付いてやっと逃げたけど、きつと殺すつもりだった、あたしを、アイツ狂ってるよ」

ユキオは黙ったまま窓の外を見ている。空調の効いた車内、ユキオの額から汗がにじむ。

雨が降りだした、雨粒がフロントガラスをポツリ、ポツリと叩いている。

「ヒラヤマ殺ってよ、ユキオ」

21 遠雷の音

「全員おりろ」

ヒラヤマは短くいった。

「一体俺たちに何の用があるんだ！」
マスターが怒鳴る。

互いに沈黙のしたままの数十秒が過ぎた。雨粒がアスファルトの路面に吸い込まれていく時の匂いがした。ヒラヤマはキルスイッチでモーターの電源を切り、左足でサイドスタンドを蹴りだすとゆっくりとバイクを降りた。

着くずしたカーキのフィールドジャケット、迷彩のカーゴパンツ。身長は2メートル近くあるが、一連の動作はしなやかで、その姿は野生動物それも肉食系特有の獰猛さと比類ない威圧感をまとうていた。

おもむろにライトバンの横に立つと、ヒラヤマはいきなり運転席側のドアを蹴り上げた。鈍い金属音がした。

つま先に鋼鉄のプレートが埋め込まれたスチールトゥブーツの一撃でライトバンのドアはべっこりとへこむ。

ライトバンは大きく揺れ、車内にレイコの悲鳴が響く、ユウジは激しく泣き叫び、リカは真っ青な顔でレイコにしがみついて震えている。

ヒラヤマ無言のまま、さらに続けて蹴りを入れる、二発、三発、四発、間髪入れずに左の前蹴りと横蹴りのコンビネーションを入れ続ける。

あっという間に運転席側のドアは大破し無残にへしゃげていく。

六発目、ドアのロックピンがはじけ飛び、八発目の横蹴りでサイドウィンドウが割れた。粉々になったガラスの破片が辺りに飛散る。

ヒラヤマは黙々と蹴り続ける。突然助手席のドアが開き、ハルトがライトバンから降りてきた。

「やめろ！」ハルトがヒラヤマに向かって叫ぶ、それを無視して黙々とドアを蹴り続けるヒラヤマ、ハルトは助手席の金属バットを握って駈け出した。

ハルトはヒラヤマの背後に回り金属バットを大上段に構えて、「やめろ！」と再び叫んだ。ヒラヤマはいきなり振り返るとハルトの腰を蹴った。何の躊躇もなかった、激しい衝撃と痛みが走った、ハルトは吹っ飛びそのまま後方へ倒れこむ、金属バットが雨で濡れたアスファルトの路面にカラカラと音を立てながら転がっていく。ヒラヤマが倒れているハルトに向かっていく。その時車からマスターが飛び出し「いい加減にしろ、この野郎！」と叫びながらヒラヤマに掴みかかった。次の瞬間、ヒラヤマの肘打ちがマスターの顔を捉えた。崩れ落ちるマスターの腹部にに容赦無いヒラヤマの蹴りがある、マスターは、後ろに吹っ飛んだ、その勢いでライトバンのボディに激突し倒れこんだ。

ハルトは起き上がりヒラヤマに飛びかかるうとした、そこにライトバンの前方にいた金髪の少年が掴みかかる、二人はもつれて横倒しになる。金髪がハルトに馬乗りになって押さえつけようとした瞬間、ハルトの右拳が金髪の顔を捉えた。金髪は顔をおさえてしゃがみ込んだ。起き上がるうとしたハルトの背中に後方にいたもう一人の少年が飛び蹴りをしかけた、たまらずハルトも前のめりにつんのめって倒れこむ。金髪が落ちていた金属バットを拾いあげてハルトの後頭部に打ち付けた。ハルトの意識が急速に遠のいていく。遠雷の音が響き、雨が激しくなった。一気に温度が下がった路面がハルトの体温を奪っていった。

Chapter
03
END

22 その街はネオシティ

やがて壊滅した以前の首都に変わり新首都が制定された。人々はその街をネオシティと呼んだ。

人口一千万人、二十一の居住区で構成されているネオシティは、事実上この国最大の都市になった。

もちろんこの国にはネオシティ以外の都市も存在してはいた。そこには領主的指導者が絶対的な権力を持ち君臨し統治を行っており、それぞれ独自の社会構造をもち、いわゆる中世封建制度的社会を形成していた。

それ以外の土地はは政府に汚染地区と指定された。そこには自給自足で暮らす、貧しい民衆が住んでいる。

ネオシティは、この国なかで唯一華やかな賑わいを見せる市民都市として、外部の貧しい暮らしを強いられている人々の憧れの都である。

その一見するときらびやかで洗練された市民社会の自由と平等を求めて侵入者も後を絶たない。

実際外部の都市や高濃度汚染地区と指定された土地からの不法な侵入者は年に数千人を数えた。

しかしネオシティは外部と分断されていて人々の自由な行き来は実質不可能であった。

ネオシティの周囲には高さ八メートルに及ぶ嚴重な要塞壁が張り巡らされていた。南北には外部とつながる二つのゲートが存在した。そこにはそれぞれ武装した政府軍のゲートキーパーが二十四時間体制で監視しており、外部から近づく者は即座に射殺された。

ネオシティは世界各国から友愛党カモガミが作り上げた完全なる要塞都市として認識されていた。

ネオシティの中心であり行政区の中央区には復興のシンボルとしてフレンドシップスクエアと呼ばれる広場が建設された。

フレンドシップスクエアでは、毎年革命記念日に、友愛党の党大会と盛大な軍事パレードが開催される。

十万人規模のこの大会は、世界に向けて友愛党員の結束と繁栄を見せつけるための一大プロパガンダとなっていた。

世界から見捨てられたこの国で……。

23 政府当局による規制

「だめです支局長！ 臓器売買児童誘拐関連の記事は全て消されます！」

ヒトミがデスクの椅子を跳ね飛ばして立ちあがった。

ネオシティ第五自治区の雑居ビル内にある独立系ニュース通信社「インディペンデンス通信社南青支局」のオフィス。

午後十時五分、支局長のキタニと女性記者のヒトミが残って明日のネットニュースに使う資料の整理を行っていた。

「またか……」

支局長のキタニは飲みかけのコーヒーの紙コップを握りつぶしてゴミ箱に放り込んだ。飲み残しのコーヒーが辺りに飛び散った。

デスク上のキーボードがコーヒーで濡れてしまい、コンピュータに接続されたスピーカーからけたたましいビープ音が鳴り出した。この街ネオシティにおけるインターネットサイトのアクセスには、政府当局による規制がかけられている。二十四時間終日、当局による監視が行われていた。

政府当局にとって都合の悪い記事や、国家運営にとって不適切と判断されたサイトの記事は政府直轄のサイバーパトロール隊によって瞬時に末梢された。

「どうします？」

「どうしますって、どうしようもないだろう」

スピーカーの接続ケーブルを引き抜きながらキタニが淡々という。「でも子供たちの命が狙われてるのに、このままほっといていいんですか！」

「いいわけないだろ」

「じゃあ、どうするんですか？」

「さあな」

「号外を出しましょう！ そして警告を促せば、被害を未然に防ぐ

ことが出来るかもしれませんが、今からネオシティ全部の印刷所を当たってきます」

「無理だ」

「どうして？」ヒトミが不満げにいう。

「今時、紙の印刷物を大量に擦れる輪転機をもった印刷屋なんて存在しない、それに、もしあっても当局から抹消された記事を印刷しようなんて気骨のある印刷屋がいると思うか？」

「……」

「とにかく今から本社に掛け合ってネオシティ二十一区全部の小中学校に連絡をとってみる、そして学校側から保護者に警告を呼びかけてもらおう」

「わかりました」

その時ヒトミのデスクの電話が鳴った。あわてて電話にでるヒトミ。

「支局長！ 第一七居住区で事件発生です！ 東和町駅でマザーレスチルドレン数名に親子がさらわれました、今のところ黒服隊に動きはありません」

「今から取材してきます！」

椅子にかけていたジャケットつかむと、ヒトミはオフィスを飛び出していった。

「気をつけるよ！」

キタニがヒトミの後ろ姿に声をかける。

全く、止めたって、言う事きくようなヤツじゃないからな。

キタニは深いため息をついた。

24 町内会長のオオクボ

「こんばんは、マスターいるかい？」

正面のドアが少し開き一人の男が顔を覗かせている。

「へ、お客さんですか？あー、マスターは今ちよつと…… 出かけて……」

カジが答える。 呂律がかなりあやしい。

「なんだ留守かい、すぐ戻るの？」

「さあー、すぐ戻るかなー」

「ますたーは、まざーれすちるどれんとでていったよ、ボクたちがお留守番ー」

ヤマサキが虚空にむかつていう。

「先生、いいから、黙っててー」

カジが慌ててヤマサキを制止する。

「あんたたちが留守番してるの？」

男はヤマサキを一瞥して不快感をあらわにした。

「じゃあ、あんたでいいから、ちよつといい？」

男は扉の外で手招きをする。

「へ、俺ですか？」

「あんたしか話せる人いないだろ？」

「はあー」

カジがハンチングの上から頭を掻いている。二人は店の外に出た。

「私は町内会長のオオクボというものだが」

「へえー」

「へえじゃない、あんたは？」

「はあ、私はカジといひまして、ここの常連ですー
かしこまってカジが頭を下げる。」

「あんたが常連なのはよく知ってるよ、毎日見るからね、毎日酔っ払って、この店の客はどいつもこいつも困ったもんだ……」

カジはすまなそうな様子で肩をすくめている。

「まあいいや、で、だいたいあのデブは何者？」

オオクボは店のほうを顎で示す。

「はあ、ヤマサキ先生ですか？」

「なに、先生なのの人！」

オオクボが目丸くする。

「医者なの？」

「いや……」

「弁護士？」

「じゃなくって……」

「はあ、じゃあ、学校の先生か」

「はずれ……」

「いい加減にしてくれ！あんたとクイズやってる暇はないんだよ！
全く」

オオクボは顔を真赤にしてカジを睨む。

「はあ、何の先生かは知らないです、みんな先生って呼んでっから、
ここじゃあ」

すまなそうにカジがいう。

「いい加減だな、で、ここが少しおかしいだろ、あの人？」

オオクボは自分の頭を指さしてカジに訊く。

「さあ、確かに少し変だけど、別に害はないし、ちゃんとお金も払
ってるし……」

「まあいい、とにかく、ここいらで噂になってるんだよ、連続殺人
の犯人があつた男じゃないかって」

「はあ、あの女殺しの？まさかあ、先生がそんな事するわけないで
すよ」

カジが笑う。

「そんな事はわからないだろ、みんな気味悪がってる、大体何者な

んだ？」

「はあ、三ヶ月くらい前かな、ふらつとこの店にやってきて、二丁の裏のウィークリーマンションに住むようになって」

オオクボはカジの話の黙って聞いている。

「お金はたくさん持つてるって、マスターはいつてたな、今一番の上客だって、それで俺たちにも気前よく奢ってくれるんで」

オオクボは手を振ってカジの話をさえぎる。

「もうわかった、とにかく明日、黒服のところに行って報告しとくから、マスターにそう伝えておいてくれ、店潰されたくないなら、今のうちに追い出すことだなって」

「はあ……」

途方にくれるカジを残して、オオクボは肩を怒らせながら去っていった。

25 高和山に急げ！

東和町駅前ロータリー、ヒトミは運転してきた小型の電気自動車を歩道脇に停車させた。

腕時計に目をやる、午後十時四十二分。

夜半に降った夕立が上がり駅ビルの上に青白い月が出ていた。

最終電車が出たあとの駅構内は閑散として静まり返っている。ヒトミは車を降りるとコンコースを巡回していた駅員を呼び止めた。

薄いブルーの夏用の制服を着た若い駅員は怪訝な顔をして立ち止まった。

ヒトミは手早く名刺を渡すと先程の誘拐事件の事を尋ねる。

しかし駅員は関わり合いになりたくないのかなか口を開かない。

駅員からやっと聞き出したのは、

マザーレスチルドレンは、親子四人と連れの少年を拉致してワンボックスカーで連れ去ったらしい。

父親と少年は暴行を受けてケガを負ってる可能性がある。連中はこの居住区の北側に位置する高和山方面へ逃走した。

目撃者数人が通報したが結局黒服隊の出動はなかったこと。

ヒトミは携帯電話でキタニに報告をいれた。

キタニから聴いたところによると、高和山中腹には数年前反社会的な行動おこし政府より解散命令の下った宗教団体の建設した施設がある。現在その施設はマザーレスチルドレンのアジトとして利用されているらしいとの情報があること。

連中は恐らく、その施設に被害者親子を監禁してる。

だがこれ以上深追いするな、というキタニの忠告にヒトミは了解して、このまま直帰することを約束し電話を切った。

ヒトミはロータリーに駐車していた車に戻った。

噴水の前にまだ車のウィンドウガラスの破片が散乱している。ここで一家は連れ去られたに違いない。

その時外灯の明かりでキラリと何かが光った。よく見ると路上に何かが落ちている、

ヒトミは、それを拾い上げるとジャケットのポケットに収めた。

車に乗り込むと、ヒトミはポケットからそれを取り出した。見覚えのあるシルバーのバングルだった。

弟のユキオが大事にしていたバングルに間違いなかった。

ユキオがこの事件に関係してる……、ユキオを連れ戻さなければ。悪い連中から救い出さなければ。

ヒトミを乗せた車は急発進した。高和山を目指して。

26 母さん行かないで！

母さん……。母さんが去っていく、僕を残して行かないで一人になりたくない。

「行かないで！、もうどこにも行かないで」叫んだ。声を限りに泣き声になった。

母さんは振り向くことはない。ゆっくり歩いて、でも一歩一歩、確実に僕から離れていく。

追いかけてしようとしたり、立ち上がって、さあ、早く。でも体が動かない。

「待って！ お願いだから、一人にしないで」
気がつくとも右手に何か握ってた。ナイフだった。刃先が鋭く、そして鈍く光っていた。

悲しいよ、一人になるくらいなら死んだほうがましだ。

僕は右手のナイフで自分の左足を刺した。大腿部が焼けるように熱かった、そして鋭い痛みが襲ってきた。

「痛いよ、母さん、死んじゃうよ、助けて！」
でも母さんは振り向きもしない。

聞こえてないの？ どんどん離れていく。

追いかけないと、立ち上がった。今度は立てた。左足から血がどろどろとふき出した。

左足を引きずりながら歩き出した。不思議と痛みは和らいでいた。すこし走ってみた。

大丈夫だ、走れる。

早く追いかけないと、母さんが見えなくなってしまう。

走った、全速力だ。喉がからからだ、水が飲みたかった。

でも今はそれどころじゃない。はやく母さんに追いつかないと。

どこからか風が吹いてきた、すこし元気が出た。

もう少しだ。母さんに手が届く。風に乗って母さんの匂いがする。懐かしい、匂いだった。

追いついて母さんの腕をつかんだ。母さんが振り返る。白いセーター、長くて黒い髪。

振り返ったその顔には目がなかった。母さんの顔の中心に暗い穴ぼこが二つ開いている。

「母さんじゃない……」

僕は顔を背けた。見たくない。母さんじゃない。綺麗だった母さん、でも顔を思い出すことはできない。

ガリガリに痩せて目のない女が僕に抱きついてきた。とっさに突き飛ばした。女がしりもちをついた。

地面に転がった女が喋った。「オマエハ、ズット、ヒトリダ……」雑音の混じったひどく聞きづらい声だった。

「うるさい、化け物！母さんがいる」

「オマエノ、ハハオヤハ、モウ、シンダ、オマエガ、コロシタ……」
「嘘だ！ 母さんに会った」嗚咽交じりに僕は言った。

女がいきなり僕の足に飛びついた。そして左足の傷口から流れ出した血をすすりだした。

僕は化け物を蹴り倒した。そして持っていたナイフで胸を刺した。ナイフは深く刺さり肋骨を折り心臓に届いたはずだった。

「オマエハ、ヒトゴロシダ……」化け物は目のない顔で笑った。
僕は狂ったように化け物を刺し続けた。何度も何度も……

「おい！ ハル。大丈夫か？」

ハルトはうなされていた。瞑つたためから涙がこぼれていた。

「おい！夢みてんのか？ ハル！」

ハルトは、マスターの声で目を覚ました。まだ焦点の合わない目で周りを見回した。

窓のない殺風景な部屋、フロアタイルにじかに寝かされていた。天井の蛍光管が白々しく辺りを照らしている。

対面する壁に堅牢そうな金属製のドアが一枚ある以外何も無い薄汚れた部屋だった。

両手は後ろ手に手錠で拘束され、両足首にも手錠が掛けられていた。

「おお、起きたか、えらくうなされてたぞ。怖い夢見てたか？」

マスターも手錠で両手両足を拘束されたまま壁に背をつけている。「俺もさっきまで気絶してたよ。でもここどこだろうな……」

マスターはハルトに笑いかけた。

「しかし、我ながら情けないなあ、さっきは何もできなかった。ケン力だけは自信があったのにな、でもあいつは化け物みたいに強いよ」

そういうと咳き込みながら、マスターは床に血を吐いた。血と一緒に折れた奥歯を吐き出した。血のついた白い歯が音を立てて転がった。

「くそつ、あのサングラス野郎俺の奥歯をへし折りやがった。口の中も相当切れてるな、血がとまらねえ……」

そういうとまた血の混じった唾を吐いた。

「しかし、ハルトには迷惑かけたな、ごめんな、こんなことに巻き込んで」

ハルトは黙ったまま朦朧とした意識の下で、さっきの夢の事を考えていた。まだ体の芯が震えていた。

オマエノ、ハハオヤハ、モウ、シンダ、オマエガ、コロシタ……

ハルトの頭の中で目のない女がいった言葉が繰り返し聞こえていた。

地面の底から聞こえてくるようなくぐもってひび割れた雑音交じりの嫌な声だ。

夢の中でハルトはまだ子供だった。

「痛くないか、頭？ 血は止まってるみたいだけど、ハルも派手にやられたな。本当に悪かったな」

マスターは心配そうにハルトに話しかける。

ハルトの顔面半分には乾いて固まった血がへばりついていて、右目が凝固した血糊で塞がれてなかなか開かなかった。

体のあちこちに違和感があったが痛みは不思議とそれほどでもなかった。

それより忘れていた何かをもう少しで思い出しそうな感覚がハルトの頭の中で渦巻いていたが、それが何なのか考えたがよくわからなかった。

その時、乱暴に鍵を開ける音がすると、ドアを蹴って金髪の少年が現れた。

金髪は大麻煙草の甘い香りを撒き散らしながら部屋に入ってきた。

「お、やっと、おきたね」

金髪はそういうと、へらへらへらと笑ってハルト達二人を見下ろした。

「子供たちはどこだ！」マスターが叫ぶ。

それを無視して金髪はハルトの髪の毛を掴みあげると、

「グル（導師）はねえ」

一瞬で頭の傷口が開きハルトは痛みで顔をしかめた。

「ボクがお前ら、ポア（殺害）していいって」

27 ヒトミとユキオ

ヒトミが運転する車は高和山の外灯もない暗くて険しいワインディングロードをかなりのスピードで駆け上っていた。

高和山山頂に続くこの坂道には四十八ものカーブがあり途中ガードレールが途切れてる区間も多くベテランのドライバーでも難所とされている。

ましてや雨上がりでまだ濡れた路面は滑りやすく、少しでも気を抜くと街乗り用にセッティングされたこの小型車のタイヤはグリップ力を失いそうになった。

しかしヒトミはグリップ限界でコーナーをクリアいく。

こんな道でスリップなんかしたら、谷底に真つ逆さまじゃない。冗談じゃないわ、ユキオを連れ戻すまでは絶対に死ねない。急なヘアピンカーブを通過する度にヒトミは祈るような思いでハンドルを操った。

ユキオ…… どうしてあなたは…… 本当に馬鹿なんだから。

ヒトミとユキオは幼い時から仲の良い姉弟として育った。優しい両親に見守られて。

幸せだった、あの事件が起きるまでは……

ヒトミ達姉弟の父親は、政府が運営している公共交通機関、いわゆる公営バスの運転士だった。

父親は公務員として国家に貢献しているとの誇りを持っており、政府からの手厚い恩恵も受けていた。

家族は政府支給の安全な食材で作った食事を取ることが出来たし、裕福とは言えないまでも一家の暮らしはこの時代において十分恵ま

れていたといえた。

母は若いときから体が弱かったが、普段は営業所で寝起きして週末にしか戻らない父親の留守を守り子供達を愛する心の優しい人だった。

その日の朝、父親は、いつもどおりに始業前のアルコールチェックを受け、車両点検を終えると営業所を出た。

始発停留所までバスを回送すると、朝の通勤通学客を乗せて出発した。

ネオシティは復興期のピークを迎えつつあり、一部の恵まれた人々に限定されてはいたが、
やっと希望の光が見えてくる時代になろうとしていた。

賑やかな学生達の会話、朝だというのに座席に座るとすぐに眠ってしまふスーツ姿の公務員達。

何も変わらない穏やかな一日の始まりだった。

父親の運転するバスは幹線道路にさしかかる交差点で信号待ちをしていた。信号が青に変わるのを確認して、

バスは幹線バイパス道路を右折横断進入しようとしたところ信号無視で突っ込んできた

黒服隊の交通機動部隊の隊員の運転するパトロールバイクに激突した。

バイクは大破し運転していた青年隊員は胸部大動脈破裂で即死した。バスの乗員乗客に怪我はなかった。

明らかに、パトロールバイク隊員の信号無視とスピードの出しすぎが事故の原因だった。

しかし黒服隊はバスが安全確認不十分のまま道路に進入したことによって事故を起こしたとして、

ヒトミの父親を業務上過失致死傷罪で逮捕した。検察が提出した証拠の多くは捏造されたものであった。

当時現場周辺では違法なパトロールバイク隊の高速走行訓練が行われており、弁護士と一部メディアは

事故は自損事故であると主張したが、黒服および検察側はこれを全面的に否定した。

この事件の取材で、国家権力の横暴に憤り、父親の無罪を訴え黒服組織を相手に最後まで対抗したのが

今のヒトミの上司であるキタニだった。

しかし最終的に裁判所が下した結果は有罪であった。

おまけに事件当日の父親のアルコールチェックで飲酒検知器に反応が出ていたのに運転し事故に至った、

という明らかに捏造された証拠が検察側から提出され、罪状は危険運転致死傷罪に切り替えられた。

当時政府は政権統率力の強化を図っていて父親側の主張を反政府的行為として受け取った結果の報復措置であった。

父親には無期懲役の実刑判決が下った。

アンティークの振り子のついた壁時計からフクロウが顔を出し午後十一時を知らせる「パワー」という間延びした泣き声をあげた。

ナカシマ家のリビングルーム、ナカシマ夫人のルミがソファアールに座り、紅茶を飲みながら海外雑誌をめくっている。

「ママ、パパはどこに言ったの？」ユイがリビングに入ってくるなり尋ねた。

「さあ、お仕事でしょ、ママ、知らないわ」

ルミは雑誌から目を離さないで答える。

「パパはどうして、リカちゃんをユイの誕生日会に呼びなさい、っていったの？」

「そんなこと知らないわ、ママに聞かれても」

ルミは、ソファアールから立ち上がり紅茶のカップを大理石製のテーブルに戻した。

「あんなみすばらしい親子なんか呼ばなくてもねえ、なんかこっちまで惨めになつたわ」

「……」ユイは黙っている。

「おまけに帰り道で誘拐されるなんて、いろいろ言われていい迷惑なんだから、まったく」

ルミは、素晴らしいながら胸元の大きく開いた派手なブルーのワンピースの腰のしわを気にして娘のユイには見向きもしない。

「さあ、あなたはもう寝なさい、いくら明日学校がお休みになったからって、もう遅いのよ！」

「だって……」

「ママは今からお出かけするから、あなたはちゃんと戸締りして寝るのよ、いいわね！」

そう言い残すとルミは上機嫌そうに鼻歌を歌いながら、頭痛のするくらいきつい香水の匂いを残してマンションを出て行った。

29 クラッシュ！

ヒトミの車はセンターラインを大きくオーバーしながら走っている。

この時間まず対向車とすれ違う事はない事だけが救いだっただ。

臓器売買なんて、なんでそんな恐ろしいことに…… はや

く…… 急がないと取り返しのつかない事になってしまう。

ヒトミはこれ以上ユキオに罪を犯して欲しくなかった。

判決が下った夜、ヒトミの父親は自殺した。拘置所の単独房でシートを裂いて窓の鉄格子にかけ首を吊っているのを巡回中の職員が発見した。

父親はすぐに病院に搬送されたが、翌朝には死亡が確認された。遺書らしきものは何も残されていなかった。

父親の自殺の知らせを聞いて、ヒトミ達家族は病院に駆けつけた。霊安室のベッドに横たわる夫の変わり果てた姿を見るとヒトミの母親は取り乱し半狂乱になった。

その日からヒトミの悪夢のような日々が始まった。家に戻ると母親は台所から包丁を持ち出し、何度も自分の喉を切り付けようとした。

ヒトミは必死で止めた。「お母さんまで死んじゃったら、私たちがどうすればいいの！」

母親はしばらく泣き叫ぶと、やがて疲れ果てて眠ってしまった。

母親の寝顔を見ながら、まだ高校生のヒトミはこれから先どうやって生きていけばいいのか途方にくれてしまった。

でも弟のユキオはまだ中学生。

これからは私がお母さんとユキオを守っていかなければ…… それからも発作的に自殺未遂や自傷行為を繰り返す母親は精神病

院に入院させた。父親の自殺を境にユキオは学校に行かなくなった。ドロップアウトしたユキオは、やがて街の不良と付き合うようになりケンカやバイクの暴走行為に明け暮れるようになった。

そして覚せい剤の乱用、さらに薬を手に入れるための窃盗を繰り返した。ついには不良グループ同士の抗争で傷害事件を起こし鑑別所に送られる事になってしまった。

ユキオの鑑別所行きを知った翌日、冬の寒い早朝、母親は病室を抜け出すと、非常階段で屋上に上り十一階の高さから飛び降りた。即死だった。

この複雑な九十九折を抜ければ、あとは緩やかなカーブが続き、その先にマザールスチルドレンのアジトがあるはずだった。

最後の急カーブに差し掛かったとき突然ヘッドライトの光の中に一人の男の影が現れた。

ヒトミは思い切りブレーキペダルを踏みつけた。

なんでこんな所に人が立ってるのよ！

車は制御不能になり大きくスピンすると道路脇の立ち木に激突して止まった。

モーターはシュンシュン音を立ててと回り続けあたりは白煙に包まれた。

運転席でコイルの焼ける臭いを嗅ぎながらヒトミは気を失った。

30 お前から殺っちゃおうかなあ

「さあ、まずはお前から殺っちゃおうかなあ」

そう言いながら金髪は倒れているハルトに馬乗りになった。

ハルトは身を擦つてもがくが両手両足を束縛されていては逃れることができない。

「さつきはよくもボクを殴ってくれたな、結構痛かったよお」

金髪は「しゅー、しゅー」と奇声を上げながらハルトの顔面を両方の拳で幾度も殴打した。ハルトの目の周囲がたちまち腫れ上がる。「すっごく楽しいよ……」

金髪は興奮していることを自覚していた、ハルトを殴る暴力行為と大麻の酔いでとろける様な恍惚感を味わっていた。

アルコール依存症だった父親に日常的に受け続けた暴力、預けられた児童養護施設の牧師に強要された性行為、少年鑑別所の職員による想像を越えた虐待の数々。

周囲の大人たちから受け続けた嵐のような暴力によって金髪的人格は荒廃して崩壊寸前だった。

だがやがて弱者に暴力を振るうことで精神の平衡性を取り戻すことと覚えた。そうやって憎悪は継承された、不毛な暴力の連鎖であった。

「さあ、殴るのも飽きちゃったから、とどめといこうかな」

そう言うと、金髪は、腰ベルトに装着してある皮製の鞘からダガーナイフを抜いた。

そしてニヤリと笑うと

「ぶっ殺してやる」

金髪はハルトの喉元に狙いをつけダガーナイフを振り上げた。

その時、いつの間にか金髪の背後に回り込んでいたマスターがそ

の拘束された両足で金髪の無防備な背中を蹴った。

その拍子でナイフは金髪の手から離れた。不意を突かれて金髪は、ハルトの上から崩れ落ちた。

ハルトは跳ね起きて金髪に上半身だけを使って肩からタックルをしかけた。金髪はバランスを崩し仰向けに転倒した。

壁を利用して素早く中腰になるとハルトは金髪の首を手錠で拘束された両足でまたいだ。

ハルトが中腰のまま壁に頭をつけて拘束され不自由な身体を安定させると

足に掛けてある手錠の鎖が、金髪の喉を締めつける形になった。

金髪はもがいたが、そのせいでさらに鎖は喉に食い込んだ。

「いいぞ！ハルト、離すなよ」

金髪の体に背中からにじり寄るとマスターは、後ろ手に拘束された両手で金髪のジャケットのポケットをまさぐった。

「よし、あつたぞ！」

マスターは、金髪のポケットから手錠の鍵を取り出した。マスターは急いで、手足の手錠を外した。

「もういいぞ、離してやれよ」

マスターは、両手を振りながらハルトにいった。

ハルトはまだ全体重をかけて金髪の首を絞め続けている。小さく唸り声を発しながら金髪を睨みつけるその顔は、まるで鬼の形相であつた。

（ハルト、いったいどうしちまつたんだ……）

金髪の首を執拗に締め上げる表情にマスターは今まで見たことのないハルトの残忍性を感じていた。

強烈に喉元を締め付けられて金髪の舌は飛び出し顔は鬱血していた。

「ハルいい加減にしろ！ そのガキ殺すつもりか！」

金髪の頸部大動脈と気管は圧迫され窒息状態にあり、酸欠で顔は紫色になり口から泡の混じった涎を流している。

失禁で濡れた迷彩柄のミリタリーパンツ越しにも金髪のペニスが屹立しているのが見て取れた。

マスターは、身体を後ろから抱きかかえると、静かにハルトを金髪の上から離した。

ハルトは呆然としたまま、マスターに身体を預けている。

「大丈夫か、ひどく殴られたな」マスターは、優しくハルトの手錠を外しながらいった。

「……」ハルトは興奮から醒め放心状態である。

金髪は、完全に気を失ってる様子で、それははまだ幼い子供の寝顔のようであった。

マスターは金髪の腰からダガーナイフのケースを剥ぎ取って落ちていたナイフを収めると自分のベルトに装着した。

金髪の両手両足を手錠で拘束して再度ポケットを探るとこの施設の元の所有者だった教団の経典が出てきた。

「例の殺人教団の経典じゃねえか、そういえばさっきグルがどうしたとか、ポアするだとか言ってたな」

「こいつ、これ読んで洗脳されちまったのかな……」

パラパラと経典をめくりながらマスターはいった。

「つてことは、ここは高和山の中腹か……」

その時突然ハルトが頭を押さえてしゃがみこんだ。

「どうした！ハルト！」

「頭が、痛い……」

いきなり頭が割れそうな激痛がハルトを襲った。その強烈な痛みでハルトは立っていることができなかつた。

「大丈夫か！ハルト！」

頭を抱えて床にのたうちながらハルトは何度も意識が遠のきそうになるのを必死でこらえた。

頭の中でバンバンと破裂音がした。まるでショートした数万ボルトの電流が脳の中で火花を散らしているような激痛だった。

31 月夜のハンター

大破した車のドアを開けてヒラヤマはヒトミを乱暴に引きずり出した。

今から数分前、ヒラヤマはアジトの見張り台となってる部屋の窓から、峠を上つてくる一台の車のヘッドライトを見つけた。

不審に思い先回りしたヒラヤマはヒトミの進路の前に立ち事故を誘発させたのだった。

一歩間違えば自分が跳ね飛ばされる危険があつたが、それをものともしないのは度量の大きさというよりヒラヤマの狂気がなすものといえた。

ヒトミの身体を直に斜面の地肌に横たえると、ヒラヤマはあぐらをかきヒトミの横に座った。

ヒトミには目立った外傷はなく、そのやや勝気さが伺えるが端正な顔立ちは月明かりに照らされてとても美しかった。

ヒラヤマはポケットから大麻草をブレンドして巻きなおしたタバコを取り出し口に咥えると火をつけた。

ヒトミの全身を眺めながら旨そうにタバコをくゆらせているヒラヤマ。

ヒラヤマは不良グループ「マザーレスチルドレン」のリーダーであり、仁勇会の杯を受けたヨシオカの舎弟でもあつた。

ヒラヤマはタバコを吸い終えると、ヒトミのパンツスーツを探りジャケットの内ポケットからプラスチック製の顔写真付きの社員証を取り出した。

しばらく眺めた後それにライターで火をつけ燃やした。更にポケットをまさぐると、バングルを取り出した。ユキオのバングルにヒラヤマも見覚えがあつた。

ヒラヤマは、しゃがんだ姿勢のままバングルを谷底に向かって放り投げた。

ヒラヤマは、両手でヒトミの首を軽く絞めた。ヒトミは少し苦しうにもがいたが目を覚ますことはなかった。

サングラスを外したヒラヤマ、その右目は醜く潰れていた。隻眼だった。ヒラヤマは片方の目で満足そうに笑った。

ヒトミの身体を軽々と肩に担ぐとヒラヤマはアジトに向かってゆつくりと歩き出した。

それはまさに仕留めた獲物をねぐらに持ち帰るハンターのようにであった。

Chapter 04 END

32 雪の日の惨劇

ケンイチは母親を殺害して家を出たあとしばらくあたりをうろついた。何処にも行くあてはなかったし戻る家もなかった。

雪は一向にやむ気配がなく、寝巻き代わりのトレーナーシャツ一枚のケンイチは今にも凍えそうだった。

数時間が経って気がつくとは結局自分の通う小学校の正門の前に立っていた。冬休みの校庭には雪が降り積もってグラウンドは一面の銀世界であった。

眩しいほど真っ白な風景の中での数人の子供たちが、雪合戦に興じていた。ケンイチのクラスメート達だった。

歓声を上げて楽しそうに雪玉を投げ合うクラスメート達をケンイチはバツクネット裏から眺めた。

一人の少年がケンイチを見つけた。そして薄着のケンイチを見て指差し声をあげて笑った。

こいよ、一緒に雪合戦やろう。

ケンイチは誘われるがままにグラウンドに入った。皆は一斉に雪玉をケンイチに投げつけた。

すぐにケンイチは雪まみれになった。五、六人の少年たちから笑い声上がる。逃げ回るケンイチ、面白がって追いかける少年達。

逃げながら校舎の方へ走っていくと雪下の花壇の柵に足を取られてケンイチは転倒した。

その時リーダー格の一際体格のよい少年が投げた雪球がケンイチの顔面に勢いよく当たった。強い衝撃を受けてケンイチの額がぱっくりと割れた。ぼたぼたと血が流れた。

その雪球には子供の拳大の石が詰めってあったのだ。寒さのせいか痛みはほとんど感じなかった。

ケンイチは雪の上に点々と落ちた自分の血を見た。血の色が金魚になった。ケンイチが握りつぶして殺した、母親が大事にしていた

あの赤い金魚だ。

金魚は雪の上から抜け出すとケンイチを馬鹿にするようにひらりと舞い、ぱちんとはじけて空中に消えた。

その瞬間今までに感じたことのない激しい怒りがケンイチを支配した。ケンイチは雪玉を投げつけた少年を睨みつけた。その視線は強い憎悪に満ちていた。

少年が叫びながら走ってきてケンイチにつかみかかった。

なんだその目つきは、お前なんか死ねばいいんだ。

そういいながら少年はケンイチを殴りつけた。何度も何度も殴った。

殴られて花壇の中に倒れこんだケンイチの指先に雪の中の何か硬い物が触れた。

用務員が片付け忘れた園芸用のスコップが雪の中に埋もれていたのだ。

少年が倒れているケンイチに再度襲いかかる。死ね！ お前なんて生きていてもしょうがないんだ！

その手には雪玉に詰めてあった石が握られていた。少年は石を掴んだ腕をケンイチの顔めがけて振り下ろした。

ケンイチはそれを間一髪で避けると握り締めたスコップを少年の顔めがけて思い切り突き出した。

スコップの先端部分が少年の右目に深く突き刺さりその眼球をえぐった。

真白の世界に鮮血が飛び散り、返り血がケンイチの視界を真っ赤に染めた。

33 お前、お袋殺したんだってな？

母親を殺害しクラスメートの少年に重傷を負わせた罪でケンイチは逮捕された。

ケンイチは、当局による数週間の取調べを経て家庭裁判所の審判を受けた後、保護処分として地元から遠く離れた児童更生施設『国立のぞみの園学院』に送致された。

ここでは、政府発行の『重犯罪児童再教育プログラム』を遂行し管理されていて、重犯罪を犯した小中学生の少年少女が収容されている。

『国立のぞみの園学院』の方針は、院生の更正、矯正および社会復帰のため、家庭的な雰囲気で成長を促進させ、訓練し教育する事を目的とするとされていた。

しかしそれは全くの表向きであり、実際の院生の生活は悲惨極まらないものであった。

職員による子供たちに対する体罰は日常的であり、食事も汚染された食材で作られた料理が平然と出されていた。

当時院生はハルトを含め四人でその内、少年が三名、少女が一名であった。皆、殺人の罪を負ってここに送致されてきた子供たちである。

凶行に至った理由はそれぞれであったが、院生五人に共通するのは、親の愛情を全く受けずに育ったという事であった。

院長はカリヤといった。宗教家でもあるカリヤは院生に自分のことを事を牧師様と呼ばせていた。

カリヤは五十代後半であったが、顔の色艶は良く見るからに健康そうであった。背は低く腹が出て太っていた。

牧師といっても服装はいつも普通の会社員が着るようなスーツ姿であった。

ケンイチは、ここに到着してまず最初の手続きを済ますとアライという三十代の施設職員にバリカンで坊主にされた。

アライは体格の良い大男で半袖のシャツから出る日に焼けたその腕は太く毛深かった。

「お前、お袋殺したんだってな？」

刈られた毛を掃除させられてるケンイチに向かってアライがいった。

「……」

「どんな気分なんだ？ 自分のお袋を絞め殺すときは？」

「……」

「何とかいえよ、お前、しゃべれねえのか？」

アライは、ケンイチの耳を掴むと力まかせに引つ張りあげた。

「痛いかな？ 何とかいえよ、オレを舐めるなよ！」

「……」

「強情なやつだな」

そういつとアライは、いきなりケンイチのみぞおちを殴りつけた。ケンイチあまりの痛みで息が出来なかった。たまらずうずくまり体を折って床に反吐を吐いた。

それからケンイチは保健室と呼ばれている独房に手錠とヘッドギア、拘束衣をかけられて二週間入れられた。

それは、新入りの収容者に課せられるここでの儀式でありこの施設の習慣であった。

これは新参の収容者の毒気を抜く事が目的の隔離であった。

院長のカリヤはここで静かに瞑想し自分の犯した罪の反省をする事をケンイチに命じた。

一人部屋の中、拘束されながら、ケンイチは母親の事を思った。傷つけた少年の事を。

幼い頃の事を思った。楽しい思い出などひとつもなかった。悲し

かった事は数え切れない程あった。
ずっと一人だった。孤独だった。暴力以外で人と繋がった事はなかった。母親でさえもそうだった。

生まれてきた事を悔やんだ。でもどうしようもなかった。
何故なのか？ 何のため生まれてきたのか？ 未来は？

雪の中に現れた金魚、それを見たときの抑えきれない憤怒、暴力衝動……。

考えても何ひとつわからなかった。

ただ空っぽになりたかった。透明になりたかった。

そしてこの世界から消えてなくなればいいと思った。

保健室から出されて数週間が過ぎた、ケンイチは相変わらず誰とも喋らない日々が続いていた。

あれからアライはケンイチに絡んでくることはなかった。ケンイチにとって穏やかな日々だった。

その日、昼食後の自由時間、窓の外の景色を一人ぼんやりと眺めているケンイチ。その背後から少女が話しかけてきた。

「何みてんの？」

ケンイチは窓の外を見つめたまま振り向きもしない。背中では平静を装っていたが内心は動揺していた。

通っていた小学校では、ケンイチに話しかけてくる子供なんて誰もいなかったからだ。

「あんたまじ、口利けんの？」

少女は、怒ったようにいうと、おどけてボクシングを真似た格好でケンイチの背中を軽く殴った。

ケンイチは、振り返り少女を見た。

「ヤメ口……」不意の問いかけにためらいは隠し切れず、ケンイチはやっとで答えた。

「なんだ、ちゃんとしゃべれるやん！」

少女はけらけらと笑いながら、

「ケンイチっていい名前やね」といった。

「……」

「今日はあったかくて、気持ちいい」

少女は、ケンイチの肩越しに眩しそうな目をして窓から見える晴れ渡った空を見ている。

振り返りケンイチも窓の外を見る。何も無い田舎の風景、南の方角のこないだまで雪化粧だった山に日が当たり緑が美しく輝いていた。

春が近づいていた。二人はしばらく並んだまま黙って外の景色を見ていた。少女の名は、アユミといった。

34 アユミの過去

アユミはケンイチより二つ年かさだった。アユミは父親を殺した罪で一年ほど前ここに送致されてきた。

アユミの父親はどうしようもないギャンブル狂で地元のヤクザの開帳する裏カジノの常連であった。

職業はタクシーの運転手であったが、家に生活費を入れる事はなく給料のほとんどは博打に消えた。

それどころか借金を繰り返して、アユミ達一家は絶えず闇金の取り立てに追い回されるような日々を送っていた。

アユミの母親はそんな夫に愛想をつかし、アユミを残して他の男と町を出て行ってしまった。

アユミが小学五年生の時の出来事であった。大好きだった母親が去って、アユミは毎日泣いて過ごした。

『はやくお母さんが帰ってきますように……』アユミは毎晩必ず寝る前にそう神様に祈った。

母親が出て行った頃から父親はアユミに暴力をふるうようになってた。

父親は博打に負けて帰ってくるとうつ憤を晴らすごとくアユミに殴る蹴るの暴行を加えた。

お前なんか生まれてこなければよかった。

殴りながら母親が出て行ったのは全てアユミが悪いからだとなじった。アユミのまだ幼く華奢なその身体には生傷が絶えることはなかった。

アユミは何度も家出を繰り返したが、父親は執拗に見つけ出すと否応なしに連れ戻した。

『逃げ出そうなんて考えても無駄だ』父親にそういわれると、アユミは慄然とし、生まれてきたことを後悔した。

アユミが中学にあがると父親の性的な虐待が始まった。この頃から父親は大酒を飲むようになり、酔っては無理やりアユミを犯した。最初は激しく抵抗していたアユミも徐々に逆らう気力を失い、父の行為を虚ろに受け入れるようになっていった。

やがて父親は、仕事にも行かなくなり毎日昼間から酒を飲んで過ごすようになっていった。そして夜になると博打に出かけた。

少しでも気に入らないことがあれば、激昂してアユミを殴った。殴り疲れるとアユミを抱いて寝た。

父親は金がなくなるとアユミに『体売って金を作って来い』といい、博打仲間にアユミを売った。

地獄のような日々であった。いくら待っても母親が戻る兆しもなかった。神に祈るのはとつくに止めてしまった。

アユミは眠りに落ちるとき毎晩、このまま目が覚めないようにと念じるようになった。

だが朝はやって来た、絶望とともに。アユミはあまりにも無慈悲な神を呪った。

やり場のない呪詛はいつの間にか父親に対する殺意に変わっていった。

アユミは父親を殺して自分も死のうと決心した。

その日は、朝から寒波が押し寄せて底冷えする夜だった。

父親は、深夜に帰ってきた。珍しく博打で大勝したらしく酒を飲んで上機嫌だった。

家にあがると父親は、寒い寒い、といいながら外套も取らず居間の石油ストーブの前にかじりついた。

しばらくすると暖まったのか、ストーブの前で父親はいびきをかき出した。

それを見て、アユミは、庭においてあった灯油のポリタンクを運び込むと居間に灯油をまいた。

すっかり寝込んだ父親のコートの背中にもたつぷり灯油をしみ込ませるとライターで新聞紙に火をつけ灯油で濡れた床にそれを投げた。

炎はまるで大蛇が地面這うように床の上をゆらゆらと広がっていった。

灯油の跡ををくねくねとたどると大蛇は父親のコートに達した、しつかり灯油を含んだ繊維は勢いよく燃え上がった。

あまりの熱さに驚いて父親は目を覚ました。父親は飛び上がるように立ち上がって振り返えると、アユミのほうを向いた。

そして自分の置かれている状況に気がつく間もなく、その激しい業火の責め苦に断末魔の叫び声をあげた。

勢いよく燃え上がる父親に向かってアユミは『ザマアアーミロ!』と叫んだ。

口が動いて父親は何か言いかけたように見えたが瞬く間に一本の火柱と化した。

アユミはここで父親と一緒に死のうと思っていたが、だんだんと燃え広がる炎の勢いに怖くなって逃げ出した。

アユミと父親が暮らす古い木造の家は全焼だった。翌朝焼け跡の中、父親は焼死体で発見された。

そして消防隊の実況見分の下、家の床下からは刺殺された二体の遺体がでてきた。

二年前に家を出たはずのアユミの母親とその情夫の白骨死体であった。

アユミは焼け落ちた家の前、大勢の野次馬のなかで呆然と立ち尽くしているところを逮捕された。

35 サイコパス

少年は意識不明のまま病院に搬送された。右目に突き刺さったスコップの先端は脳にまで達していて極めて重篤な脳挫傷を負っていたのだ。

少年は集中治療室で一週間程生死の境を彷徨ったがなんとか一命は取り留めた。八日目の朝、こん睡状態から意識が戻った。

しかしこの傷による後遺症はその後の少年の人生に暗い影を落とすことになる。

『サイコパス』

歴代のシリアルキラー（連続殺人者）は、脳障害をもつ者が多いと云われる。彼らは、先天的もしくは後天的な脳の障害によりサイコパス（人格障害者）となり犯罪を繰り返す。

サイコパスは良心や善意、愛情という本来人間のもつ本質的な感情が欠落している。通常の間人は欲望というアクセルに対してそれを抑制する良心というブレーキが正常に機能している状態と云える。その場合、事故を起こす確立はゼロではないが、滅多に起こす事はない。

サイコパスではない『普通の悪人』になると、アクセル（欲望）に対してブレーキ（良心）が弱すぎるか、ブレーキが故障した状態あるいはアクセルをうまくコントロールする事が出来ない危険な性質を持っていると云える。この場合は適切な修理や整備を行えば状態が改善される場合も多い。

しかしサイコパスにはアクセルだけついていてブレーキは存在しない、一度火がついた欲望は止むことがない。誰かに止められるまでその狂った暴走を続けるのである。

少年はこの時受けた脳障害が原因となり時折欲望の抑制が効かなくなつた。

損傷した脳はブレーキを失いつつあつた。抑えきれない性欲と壊れた良心との葛藤、その苦悩は通常の人間の想像を絶するものであつた。

しかしコントロールできない少年の歪んだ欲望は徐々に反社会的な行動と繋がっていった。苦しみ、憎悪した、自分自身の狂気を呪つた……。

少年は十五歳になると最初の殺人を犯した。抑えきれぬ衝動で十三歳の少女を強姦し絞め殺したのだった。

死体は二つの眼球をガラス瓶につめてコレクションとして残したあと、一部（乳房、尻、大腿部）は、ナイフで切り取りフライパンで調理して食べた。

あとの部位は電動ノコギリで四十八のパーツに切断したのち山中に捨てた。

少年はサイコパスへと変貌を遂げたのだ。少年は自分をモンスターに変えたケンイチを憎んだ。

そしてその日を待ちわびて生きていくようになった、ケンイチに復讐するその日を……。

36 罪と罰

初めて口をきいた日から少しずつではあったが、ケンイチはアユミに心を開くようになった。

同じような境遇で同じ罪を背負った二人の悲しみは共鳴し、交じり合った。

「……楽しかった？」 「何が？」 「子供の頃よ」 「まさか……」

「ぜんぜん？」 「ああ、ぜんぜん」 「ひとつくらいあるでしょ？」 「……ないなあ」

「あはは、可愛そう」

「アユミはあるのか」 「うーん、あるよ」

「お母さんがいた頃は楽しかった」 「そっか」

「あ、ごめんね」 「……いいよ」

アユミは自身の犯した父親殺害、その罪の重さに苛まれていた。夢の中に現れる父親はその焼け爛れた顔でアユミに呪いの言葉を浴びせた。

目が覚めてからも逃れようがない罪悪感に押しつぶされそうになった。

お父さん……。ごめんなさい、でもそうするしかなかった……。

アユミは父親の夢を見る度、贖罪の祈りを繰り返した。

ケンイチもまた母親を殺害した事による良心の呵責に苦しめられていた。

僕もあの日雪の校庭で殴り殺されればよかったのに。

ケンイチはそう思うようになっていった。

ケンイチはアユミと話してる時だけは穏やかになれた。そのささ

くれ立つた心が癒されていくのがわかった。
ずっと孤独だったケンイチにとってアユミは初めて出来た友達といえた。

「だれか待つてる人いる？」 「いない」

「ここでたらどうする」 「わからない」

「じゃあ、一緒に暮らさない」 「……」

「あはは、似たもの同士一緒にいるのも悪くない」

ある朝院長のカリヤは二人を二階にある礼拝堂に呼び、ひざまずき神に祈るように命じた。

「この祈りは、『私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました』

という事だ。それでお前たちが罪を犯した者を赦したように、主はお前たちの罪も赦してください」

「でも、私は赦すことはできません」とアユミはカリヤに向かっていった。

「お前はどうか？」 カリヤはケンイチに向かっていう。

「わかりません……」 ケンイチは呟くようにいった。

「そうか…… まあいい」

そういうとカリヤは慄然として奥の部屋に姿を消した。

一階に下りて自分の部屋に戻ろうとしていたケンイチを施設職員のアライが呼び止めた。

「ちょっとこい！」

アライの手には竹刀が握られていた。

保健室にケンイチを押し込むとアライはいきなり竹刀でケンイチの太股の裏を叩いた。

たまらずケンイチは床に膝を付いた。

今度は竹刀の先でケンイチの腹を手加減なしに突いた。激痛が腹

部を貫き四肢が痺れた。

腹を押さえてうずくまるケンイチの頭めがけてアライの蹴りが飛んできた。

ケンイチの眼の裏に閃光が走った。

苦しむケンイチを見てアライは楽しむようにサディスティックな薄笑いを浮かべている。

「これはお前の犯した罪に対する罰だ！」

そういうとアライは倒れて呻き声をあげているケンイチの髪を掴んで顔を持ち上げ、

両手につけていた軍手を外ずし、それを丸めて無理やりケンイチの口に押し込んだ。

そして更に殴る蹴るの暴行を続けた。

ケンイチは気がつくと自分の部屋のベッドで寝かされていた。

何時間たったのだろうか……。

遠くで犬の遠吠えが聞こえた。窓の外はもう真っ暗だった。

時計を見ると真夜中だった。

ぼんやりと霞がかかった頭でアライがいった事について考えた。

これはお前の犯した罪に対する罰だ。

ベッドから身を起こす、体中が痛んだ。

お前の犯した罪……。

母親を殺した……。僕が殺した。今でもあの感覚は忘れる事は出来ない。

だが夢の中の出来事のような気もしている。死んでしまえば罪は消えるのか……。わからなかった。

ケンイチは部屋を出ると食堂に向かった。台所の包丁が入っている抽斗をあけると一番大きな牛刀を取り出した。

疲れた。もうこれ以上生きていても意味がない。ケンイチはここで死のうと思った。

37 真夜中の銃弾

牛刀の刃先を自分の喉もとに突きつけたその時、どこからか微かに声が聞こえた。

猫の泣き声のようだった。ケンイチは声のするほうに歩いていくと、院長室の前に着いた。

ドアの前に立つとそれははつきりと聞こえた。それは猫の泣き声じゃなくアユミの喘ぐ声だった。

ケンイチはドアを空けた、鍵は掛かっていなかった。アユミの白い肌がケンイチの目に飛び込んできた。

院長のカリヤが机の上のアユミに覆いかぶさっていた。

「なんだ！」カリヤはケンイチに向かって叫んだ。

ケンイチはアユミを見た。アユミが目をそらす。「なんのつもりだ！」というと、カリヤはアユミの身体を突き飛ばした。

ケンイチの手にしている牛刀をみるとカリヤは眼を大きく見開いて狼狽した様子で

今度は「……待て、はやまるな」とうわずった声を上げた。

ケンイチは牛刀をだらりと下げ呆然と立ちすくんでいた。

床に倒れたアユミがケンイチを見上げて「……ケンイチたすけて」アユミの口がそう動いた。

アユミの口からひらりと赤い金魚が現れた。

「ヤラレタラヤリカエセ」金魚がそういった。

ケンイチは「俺はお前を赦さない、ぶっ殺してやるよ！」カリヤに向かってそう叫ぶと部屋の中に足を踏み入れた。

「待ってくれ、私が悪かった… 殺さないでくれ……」

ケンイチは牛刀を構えると命乞いをするカリヤにじり寄った。

その時、宿直室で騒ぎを聞きつけたアライが院長室に飛び込んできた。

ジャージ姿のアライの手には木刀が握られていた。

「お前まだやられたいのか！」木刀をケンイチに向かって振り下ろした。

ケンイチは牛刀でそれを受けた。ケンイチは無我夢中で牛刀を振り回した。

牛刀の刃先がはアライの木刀を握る手に触れると、アライの指が二本弾け飛んだ。

アライは呻きながら咄嗟に木刀を捨てると指が切断された左手を右手で押さえて後ずさった。

足がもつれてアライはしりもちをついた。

ケンイチは構えなおすとアライの顔面に牛刀の切っ先を突きつけた。

「殺さないでくれ……」泣きながら懇願するアライ。

「これはお前の犯した罪に対する罰だ！」ケンイチはそう叫んだ。

その時三発の乾いた銃声が響いた。カリヤが机の抽斗から取り出した護身用の小型拳銃で発砲したのだった。

そのうち一発の弾丸がケンイチの右のこめかみに小さな穴を開けた。

スローモーションのように崩れ落ちるケンイチ。

「ケンイチイー！」アユミの絶叫が真夜中を切り裂いて響きわたった。

38 死体処理屋

啞えタバコの男は鼻歌を歌いながら手馴れた動きでケンイチの身体を黒い遺体袋に詰めている。

「歌うのはやめてくれないか」

カリヤは苛立たしそくに顔をしかめながらいう。

「ああ、すまない、牧師さん。耳障りだったかな、下手くそな歌で悪かった」

「いや、歌が下手とかじゃないんだが……」

「不謹慎って事かな？」

「いや、もういい。兎に角、判らないようにやってくれたらいいんだ」

黒いニット棒を被り全身黒づくめの男はしゃがんだ姿勢から立ち上がると不自然にあごを上げたポーズでカリヤを見た。

そしてその上下斜視でやぶ睨みの顔をくしゃくしゃにしてでニヤリと笑った。

「ああ、心配しなくても大丈夫だよ、今回もちゃんと判らないように消すから、硫酸の樽でジューって溶かしちゃうんだ、最初はすっげえ臭えけど一週間できれいに消えちゃうよ、硫酸っていったけど本当は塩酸も混ぜるんだ、そうしないと樽まで溶けちゃうからね、そこらへんのコツっていうか、さじ加減が難しいけどよお。まあ俺は熟れてつから、ばつちりよ。言うなら門外不出の特殊技術だな。まかせといてくれよ、牧師さん！」

男は胸を張って自慢げにいった。

「……。ああ、わかった、よろしく頼む」

カリヤはたじろぎながら返答した。

「死亡診断書は郵送するからその後で代金は振り込んでくれればいいよ、お得意様だから今回は一割引きでいってボスが言ってた、よかったな、牧師さん！」

「悪いな……」

「いや、悪くないよ、こつちも商売だ。このガキが生きてたって世の中の害になるだけだし、牧師さんはいい事したって事よ」

そういうと男は遺体袋を肩に担ぎ部屋を出て行った。

こうしてケンイチの死体は闇組織の死体処理屋によって施設より運び出された。

カリヤは自分の犯した性的虐待が発覚する事を恐れケンイチの死体を極秘裏に処理したのだった。

車は施設を出てしばらく走ると廃屋と化しているドライブインの駐車場に止まった。男は車から降りると小走りで駐車場の隅へと急ぐと立ち小便をはじめた。

（ふう、もう少しで漏らすとこだった。この時間はやっぱりまだ冷え込むな）

時刻は明け方四時半、吐く息は白い。用を足しながら見上げるとかろうじて『旭屋』と読める朽ち果てた看板がかかっている。辺りは人影はおるか猫の子一匹いそうにない寂しいばかりの風景である。（あのガキも可愛そうに。牧師さんもお祈りくらいしてやればいいのに……）

車に戻って乗り込もうとしたとき、トランクから微かに物音が聞こえたような気がした。男は恐々とトランクに耳をつけた。やはり遺体袋の中で身をよじる様な音と呻き声が漏れている。

（大変だ、ガキが生きてやがる！）

男はあわててポケットから携帯電話を取り出した。

ボス、ガキがまだ生きてますよ。

へえ、確かに頭に弾ぶち込まれてましたけど……。

トランクの中で死体バックがごそごそ動いてやがる、気持ち悪くて。

牧師さんに返してきましようか？

はあ、無理ですか……。

えっ！バラせて……、俺が！？ とんでもない！ 嫌で

すよ、コロシなんてできませんよ。

困ったなあ……。

え、どこの研究所？

そこに運べばいいんですね。

男は車を出すと逃げるようにその場を後にした。

39 機械の中の幽霊

手術台の前白衣の男が一人でケンイチの開頭手術を行っている。その部屋は普通の病院の手術室とは違い、異様な数のコンピュータとおびただしい量の電子機器に囲まれていた。

『エピソード記憶』

人間の記憶は短期記憶と長期記憶に区別される。短期記憶とは文章を書き写したり、電話番号をプッシュしたりするための極めて短い記憶をいう。数分以上の長い記憶は長期記憶という。同じ長期記憶でも、二十分後には忘れてしまうものから何年間も覚えているものまである。また、一時的に忘れていても、何かのきっかけで思い出すこともある。長期記憶は大きく分けて『意味記憶』と『エピソード記憶』に分類できる。意味記憶とは言葉を覚えたり、試験勉強をしたり、本や講演などで知識を吸収したりする記憶のことをいう。一般に記憶力の良し悪しを論ずる場合は、この意味記憶を指している。意味記憶を一般的に云う『知識』だとするとエピソード記憶とは直接体験することによって記憶される『思い出』のことを云う。幼少期から現在までのさまざまな出来事、育った家の周りの景色、学校などの道順と風景、直接かかわった人のイメージなどがエピソード記憶である。

被弾した右側頭部、脳内部から銃弾の摘出。ケンイチの右の海馬は銃弾によって損傷していた。人工海馬の移植、男の手によってケンイチの脳にマイクロチップが埋め込まれた。

『海馬』

人間の脳には、左右に『海馬』と呼ばれる器官がある。タツノオトシゴにそっくりの形状をしたその器官は人間の記憶を司る機能を

持っている。海馬は脳の中では小さな器官で、脳全体の一万分の一に過ぎない。しかし海馬は小さな器官ながら、大脳に入った情報の取捨選択をして、記憶全体をコントロールするきわめて重要な役割を果たしている。

海馬は、パソコンでいえば一時的に情報を記憶するメモリの役割を果たしていると云える。そして必要があれば、パソコンを終了する前にデータを保存するのと同じように、海馬も記憶を大脳皮質に送って長期記憶として保存する。大脳皮質というハードディスクに長期記憶されたファイルを呼び出すことも『海馬』の役割であり、それは『思い出す』という作業である。海馬は人間の記憶の司令塔だと云えるのであった。

ケンイチの脳に移植されたマイクロチップが発する脳波を手術台の横に配置された大型のバイオフィードバック受信機が受信している。

手術台に固定された脳波モニターがケンイチの脳波をリアルタイムにサンプリングしている。男は受信機から出ている六十箇所に及ぶ電極が繋がっている特殊なヘルメットを被り電極パッドを自分の頭皮にセットした。そしてアームレストの付いたゆったりとした革張りの椅子に腰を深くおろすと静かに眼を閉じた。瞑想。男は精神を集中させた。ケンイチの過去の記憶をマイクロチップで吸出し自分の脳にイメージとして直接呼び出そうというのだ。

数十分が経過した。何も起こらない。ケンイチの記憶の扉、それはガードが固くなかなか男の呼び出しに答えようとしないうつだ。

封印を解くパスワードが必要なようだな……。

男はヘルメットを外し椅子から立ち上がった。壁際に備え付けられた棚からビンテージブランデーのボトルを取るとその琥珀色の液体を手元のビーカーにきっちり百ミリリットル注いだ。しばらく手

のひらで温めるようにビーカーを包み込んでいたが、やがてその芳醇なアルマニヤックの香りを確かめる事もなくストレートで一気に飲み干した。焼いたワイン、その液体は男の乾ききつた喉を爛れさせみぞおちを焦がす。男は机の抽斗を開けると白い小さな結晶の入った小さなビニール袋に手を伸ばした。パケを破り耳かき大のアルミの軽量スプーンでその白く透き通った砕けた氷砂糖にも似たメタンフェタミンの結晶をこぼさぬよう注意深く試験管に移した。試験管に蒸留水を注ぐと結晶が弾けて踊りだす。それを試験管ミキサーのゴムの振動板に押し付けた。シェイカーのスイッチが入り試験管を細かくシェイクするとあつという間に無色透明の覚せい剤の注射液が出来た。男はデイスポールザブル25G針付き注射器の梱包を歯で破ってポンプを取り出すと試験管の中のシヤブ液を泡立たぬよう静かに吸い上げる。白衣のポケットからワンタッチで着脱できる駆血帯を取り出し先ほどの椅子に腰掛け左腕の袖をまくり腕を一旦下げた後、上腕部を締め付けた。男の腕に紫色の静脈が浮かび上がった。男は注射器の針を肘の内側の静脈の一番怒張した部位に刺して針が血管の壁を破るプチツという感触を確かめると今度はやや角度を浅くして更に針を進めた。プランジャを指先で少し戻すとシリンジ内のシヤブ液に血液が逆流してきた。それで血管にしつかり針が進入している事を確認すると、緩やかにプランジャを押し込んだ。冷たい感覚が左腕から全身に広がっていく。血中に進入した劇薬はアルコールの酔いも手伝って男の循環器を駆け巡り瞬く間に中枢神経を直撃した。目の眩むような強烈な快樂が脳天から背骨の脊髄に伝達され男の全身を走り抜けた。自律神経は変調を起こし瞳孔は開いたままになり、呼吸は荒がり心臓は早鐘を打ち続ける。しかし反対に意識は冴え渡り集中力が増大していくのを男は感じていた。

男は再度ヘルメットをかぶり目を閉じた。椅子に預けていた身体はまるで重力から開放され浮遊しているように感じさせる。薬効がクライマックスに達しようとしていたその時、まず聴覚に異変が起

こつた。音が聴こえてきた。最初は遠くから。二拍子で弾くエレキベースの重低音にあわせてバスドラムをキックしているような規則的な鼓動が何処からともなく聴こえてきた。音は次第に強まり男の身体を揺さぶるまでになる。男は宇宙空間に浮かびただ鼓動に身を任せていた。心地よかった。安心感に包まれていた。母親の胎内にいるように……。正にこれはケンイチの胎内記憶だった。いつまでもこの幸福感を感じ続けていたかった。だが急に男は地表に押し付けられた。音が途切れ重力が戻った感じがして次の瞬間どうしようもない不安感が男に忍び寄る。なんだか判らない押しつぶされそうな圧力と息苦しい程の閉塞感が襲ってくる。寂しさ、孤独、疎外感。寂寥感。助けを呼んでいた、泣き叫んだ。しかし誰も手を差し伸べてはくれなかった。痛み、激しい痛みが襲ってきた。手や足や頭、顔、腹部……。体中で痛みを感じた。暴力の記憶だった。その悲痛な記憶は徐々にエスレートしていき男の五感を揺さぶり続けた。母親から受けた仕打ち、その情夫達から受けた暴力、せつかん、怒号。叩かれ、殴られ、蹴り上げられ、叩きつけられる。うるさいと叱咤され泣く事も許されなかった幼年期の記憶、波のように押し寄せて浴びせかけられる罵声と悪意。空腹、火傷の痛み。嗅覚は何か焦げるような悪臭を感じている。タバコの火で焼ける皮膚と肉の臭い。指先には生爪が剥がれる感触。自身のあばら骨の折れる鈍い音。内出血の疼き。気管に水が入って息が出来ない苦しみ。怯え、怖気、恐れ、おののき、恐怖の連続。(……凄まじい記憶だ……信じられない)五感の全てで感じたありとあらゆる痛みをケンイチの脳は驚く事に全て克明に記憶していたのだ。戦慄が走り母親とその情夫達に対する怒りの感情が噴出してくる。呪いの祈り、呪詛、呪言、母の愛を求めれば求めるだけ増幅してゆく憎しみ。絶望。愛から憎悪へ。倒錯してゆく親子の情愛。(あまりにも悲しすぎる……)脳裏に赤い金魚が突然現れた……。狂ったように泳ぎ回るそれは金魚本来の愛くるしさを全く感じさせない……。ランブルフィッシュ。それはまるで死ぬまで戦い続けるといわれる闘魚のような猛々しさを持

つっていた。めくれあがった口から見えるその顎にはまるでピラニアのように鋭く尖った歯が並んでいる。金魚が口をあけた、そして喋った。「ヤラレタラヤリカエセ」確かにそう聴こえた……。その金魚が現れたとたん男は激しいシヨック状態に陥った。心臓を鷲づかみされたような苦しさ、呼吸も困難になり頭が割れそうに痛み出した。ケンイチのどす黒く渦巻く殺意、闘争本能。その象徴である赤い怪魚。母親殺害。ケンイチの忌まわしい呪事の記憶が今まさに男を飲み込もうとしていた。ケンイチの激しい思念が男の精神を支配してゆく。ケンイチの強靱な生存本能が男の自我を突き崩しかけていた、今男の精神は崩壊寸前に達していた。

「父さん……」

男は薄れ行く意識の中でその声を聞いていた。

「父さん、もうやめて……」

「……エイジ……エイジなのか？」

「そうだよ、このままじゃあ、父さん死んじゃうよ」

「おお、エイジ……、よく還ってきてくれた」

男の頬に一筋の涙が流れ落ちる。

「これは、お前を蘇らすためなんだ……」

「わかってる、この子の身体を使って僕を再生させようって思ってるんだね？」

「そうだ、父さんはどうしてもお前にもう一度会いたいんだ、お前のデータは全てそろっている、生まれてからの記憶、脳の全情報はコンピュータに保存してある、そのデータをこの子の脳の記憶を消去して上書きすればいいんだ、人格の交換。出来ない事じゃない。

その為の人工海馬シリコンチップの開発、二年間不眠不休でこの研究に没頭してきたんだ、それがやっと完成したんだ」

「ありがとう、うれしいよ、すごくね。僕も父さんに会いたいよ、でも、このままじゃあ父さんが死んじゃう」

「……エイジ、父さんを許してくれ、あれは決して危険な実験じゃなかった」

「うん、わかってるよ。父さんを恨んでなんかないよ、あれは事故だったんだ」

「だから、この子の身体を借りてお前をもう一度……」

「もう、いいんだ、父さん、僕はもう死んだんだ……」

「エイジやめてくれ、父さんはお前が死んだなんて思った事は一度もないんだ、あれからもずっとお前と一緒に暮らしてきたつもりだ」

「……父さん」

「もう一度、お前をこの手で……」

コンピュータの中に記録されたデータにあるエイジの残留思念。その残存する意識が微弱な電気信号となりコンピュータの電子回路を介して増幅され男の潜在意識に直接語りかけているのだ。今、エイジは機械の中の幽霊として父親との再会を果たしているのだった。

40 ハルト誕生

男は脳科学の分野の天才。政府の研究機関で国家プロジェクトにたずさわりその将来を嘱望されていた。

そのプロジェクトとは人間を遠隔操作する電磁兵器の開発。そして二年前ある実験の被験者に男は自分の息子であるエイジを選んだ。しかしそれは男の言うように決して命の危険を伴うような実験ではなかった、筈であった。

だが実験の過程でエイジは命を落とした。不慮の事故。男は嘆き悲しんだ。愚かだった、野心のために非人道的な兵器の開発に手を染めた自分を呪った。

男は逃れるように政府の研究所を去った。

手術台の上で眠るケンイチ。トラウマのフラッシュバックで苦悶の表情を浮かべている。

「見てみて！この子拳を握りしめてるよ。まるでファイティングポーズとつてるみたいだ。父さん、この子の生存に対する執念はすごいよね」

「そうだな……」

「全身全霊で『生きていたい』っていつてる。あれだけの仕打ちを受けたのにまだ生きていたって……」

「……」

「ねえ、とうさん、この子を生かしてあげようよ」

「……しかし」

「この子は確かに罪を犯したかもしれないけど、罰はもう十分受けてるよ」

「……」

「罪は罪だけど…… そうしないと自分が殺されちゃうから、そう

「やっただけでしょ」

「……………そうだな」

「じゃあ、決まりだね！ そうだ！ 新しい名前を考えてあげないとね。うーん、ハルトはどうか。この子の将来が晴れやかで春の日のように穏やかであるように……………」

「ハルトか……………、だがエイジはそれでいいのか？」

「うん、僕はこの子に比べたら何倍も幸せだった。よかったよ、父さんの子供に生まれて」

「エイジ……………」

「父さん、そろそろ時間みたいだ……………。もう残留エネルギーが切れそうだ……………」

「エイジ、待ってくれ！」

「父さん……………、ありがとう……………」

「エイジ！！」

エイジの思念はそこで途切れてしまった。

ケンイチの脳、たんぱく質のレベル操作による特定の記憶の消去。しかしこれだけ強烈にDNAレベルで書き込まれた記憶を完全に消し去る事は不可能だ……………。

人工海馬によるトラウマのブロック機能と合わせればなんとか忌まわしい記憶を封印できるだろう。

ケンイチは生まれ変わった、ハルトとして。全ての作業を終えると男は倒れこむように深い眠りについた。

しかしケンイチの黒い記憶はこの時、男の精神に深いダメージを与えていたのだった……………。

41 シークレットルーム

中央通りを抜けて花屋の角を右折し千歳通りに入る。明滅するきらびやかな風俗店のネオンサインが目飛び込んできた。色とりどりの光が雨で濡れた路面に反射して幾重もかさなり合い、一瞬妖しい幻想世界にでも迷い込んだような奇妙な錯覚に陥る。神天町一番街。この国の富裕層とその金目当ての女術で賑わう眠らない街。ネオシティ最大の歓楽街である。いつもは酔客で溢れるメインストリートも宵の口に振った雨のせいで客足が遠のき今は閑散としている。ブラックスーツに身を包んだ二人の男が通りに現れると、所在無く路肩にたむろしていた若い客引き達がやにわに色めき立つ。しかしそれがボディガードのヤオ・ミンを引きつれたヨシオカだと判ると、まるで見てはいけないものでも見たかのようにあわてて目をそらし無言で散らばってゆく。肌蹴た黒シャツから籠の抜き彫りをのぞかせた地廻りのチンピラだけが大げさに挨拶をしたが、ヨシオカはそれを一瞥しただけで無視して通り過ぎた。

二人はこれ見よがしに壮麗な雰囲気を放って建っている青みがかった磁器タイル張りのビルの前で立ち止まった。ヨシオカは御影石が敷き詰められたエレベーターホールにヤオ・ミンを待機させると独りで八階に向かう。入り口脇の静脈認証システムのスキャナーに人差し指をかざすと『ラ・イスラ・ボニータ』の防弾ガラス製の分厚い自動ドアが滑るように開いた。

中央に配置されたグランドピアノを囲むようにゆったりとしたリザーブエリアのソファアが放射線状に並ぶ店内。高価なドレスで着飾ったホステス達は皆整いすぎていて無機質な鉱物のような顔立ちをしている。年会費がべらぼうなこの高級会員制クラブのラウンジは特権階級に属する男達でほぼ満席であった。優雅に談笑している女達の本音は贅沢な暮らし、その為のお大尽なパトロン探しに他なかった。

マネージャーが寄ってきてヨシオカに耳打ちをする。ヨシオカは無表情で頷くと受付のバックカウター奥の隠し扉の向こうに姿を消した。そして一般客には秘密の通路をたどるとその先にあるシークレットルームのドアをノックする。

「お待たせしました」

絨毯敷きの十畳程の個室。肌寒いくらいに空調が利いている。黒い革張りのソファーに大きなガラステーブル。一人の男がグラスに注がれた透明の酒を旨そうにすすっている。

友愛党幹部のナカシマであった。

「首尾はどうだった？」

「おかげさんで」

「そおか」

ナカシマは興味なさそうに頷くとほんのりと湯気の上がるグラスに口をつけた。

「そいつは焼酎ですか？」

「うん、芋焼酎のお湯割りだ。持ち込みで悪いがな。真夏でも寒いくらいに冷やした部屋でこいつを飲む。俺はこれが一番好きなんだ」

「よく手に入りましたね」

「ああ、カモガミ総統の大好物だな。海外産の安全なサツマイモで特別に造らせてる」

「わざわざですか？」

「ああ、この国の土壌はもうだめだ。放射能汚染が蔓延してる……。半永久的に農作物はだめだな。まあそれでも普通に売ってるけどな。国産の農作物は」

「金のない庶民はそれを食うしかない。命縮めるってわかってても、空腹はがまんできねえ」

「その通りだ、食いたい奴は食べばいい」

ナカシマが吐き捨てるようにいう。ヨシオカが苦笑した。

「焼酎なんて昔は安酒の代表格だったのにな……。微かに芋の香りがするこいつが、不思議なもんで年代物のコニヤックなんかより旨く感じる」

ナカシマは目を細めてグラスを眺め呷くようにいった。

「どうだ、一杯飲んでみるか？」

「折角ですが今日はまだ落ち着かないもんで」

「そうか、相変わらず忙しそうだな」

「いや、先生ほどじゃあないですよ、でもたまには家族サービスも必要でしょう？」

「ああ、ゆっくり女房子供と飯食いながら話す、なんて事はもう何年もないな……」

「今日はここでゆっくり遊んでいって下さい、新しい娘でも呼びましようか？」

「折角だがここは落ち着かなくてな」

「そうですね」

そういうとヨシオカは空になったグラスを手に取り新しいお湯割を作るとナカシマに差し出した。

「で、次のターゲットは？」

「そう急かすな、それは追って連絡する」

そう言うとなカシマはテーブルの上に視線を落とし注がれたグラスに口をつけた。

「しかし、よく考え付いたなこんな事」

「うちの稼業も今は大変なんですよ、昔みたいなシノギじゃ先細りです。時代にあった商売ってやつを開拓しないと生き残っていけ

ない」

「まあな、人は変わるもんだし、時代は動くものだ」

「臓器移植を待ち望んでいる子供たちは世界中にいるが、正規のルートでは、脳死になった子供の臓器がなかなか出てこない」

「ああ、それに小児臓器の移植を認めてる国もまだ多くはない」

「大金持ちはいくら払ってでも病気で苦しんでる自分の子供の命を助けたい……でも何処の馬の骨かわからないガキの臓器じゃ嫌だ、どんな感染症もってるかわからない。実際エイズに感染した子供の臓器なんてゴミ箱行きです」

「安全は金で買うものだ」

「まったく金持ちって言うのは勝手なもんですぜ、自分の子供が助かればそれでいいっていうんだから、他所のガキがバラバラに刻まれて死んでいこうが知ったこっちゃない、おんなじ人間なのに」

「それが親心だ」

「まあそうですね」ヨシオカは頷いた。

「そこで頭のいい闇ブローカーが我が国の十歳以下の子供に目をつけた、ネオシティの小児臓器は今や立派な高級ブランドですぜ。『友愛党の政策の下で育てられた子供はストイックなほど安全な食品しか摂取してませんよ、全くの無菌で衛生的、安心安全です』そんな謳い文句で世界中の大金持ちがこぞってこの国の小児臓器に飛びついた、全くいい加減なもんだイメージ先行もはなはだしい」

「ブームというのはそういうもんだ」

「はい、俺達だって高く売れば、そんな理屈はどうだっていい」「うむ」

「しかしいくらなんでも無差別に子供さらって売り飛ばすなんて無茶な話だ、そんな事はできやしねえ、この国は表向きは民主主義だが実質クーデター以来友愛党の軍事政権の下にあるわけだし。さすがに黒服は怖いですよ、俺達だって……」

「まあな」

「そこで協力者が必要だ、国家権力っていう」

「それで、黒服に顔の利く私に目をつけた」

「いやいや、目をつけたなんて……」

「まあいい。続ける」

「実際反政府分子っていうのは厄介なもんですよね、地下に潜って活動し気が付いたときには遅い。テロリズムってのは一瞬の隙を突いて行われる、テロリスト達は市民面して普通の庶民生活を装ってやがる、見分けがつかねえ」

「お前達ヤクザのほうがりやすくて楽だ」

二人は笑った。

「で、ちよつとだけ情報を分けてもらう、そして俺たちは政府のテロリスト対策のお手伝いだ。少しの間黒服に眼をつぶってさえもらえればそれでいい。それで政府は反政府分子を家族ごと処分できる、我々はリスクなしで莫大な利益が確保できる。ギブアンドテイクってわけです」

「まあ、そうだ」

「まあそれが実際テロリストかどうかなんてどうでもいい訳で。大義名分さえあればいい。そして先生は俺達の上前をはねる」

「何が言いたい？」

「いいえ、言いたい事なんてないですよ、ただお互い様だってわけですよ、蛇の道は蛇。ねえ先生」

「今も昔も政治には金が掛かるものだ」

一瞬の沈黙。ヨシオカがタバコに火をつける。

「で、誰が一番悪党なんですかね……」

「さあな、そんな事は考えるだけ無駄だ……」

ナカシマが続けて何か言いかけた時ヨシオカの携帯電話が鳴った。

「失礼」とナカシマにことわりヨシオカは電話に出る。

事務所当番の組員からの電話だった。

「どうした？」

『ノセさんから電話がありました。相談したいことがあるからいつも所に来て欲しいとのことです』

「ああ、わかった、すぐ行く。他に変わった事はないか？」

『今のところはあります』

「そうか、なんかあったら知らせてくれ」

「先生すみません、ちょっと野暮用ができて……」

「ああ、気にするな、適当に飲んだら帰るから」

ナカシマはそういうとグラスに残った焼酎を飲み干した。

42 叔父貴

裏通り、二十四時間営業の居酒屋。一番奥のテーブル席で上下ジヤージ姿のノセが発泡酒のジョッキを傾けている。

「久しぶりだな」

「叔父貴、ご無沙汰してます」ヨシオカは頭を下げる。

「お前んとこ最近やけに景気いいんだってな？」

卑屈な笑みを浮かべてノセが訊く。

「そんなことはないですよ、相変わらずの貧乏所帯です」

「とぼけるなよ、薄汚ねえポートビール引き連れて調子こいてるんじゃないぞ、こら！」

赤い顔をして酒臭い息を吐きながらノセがわめき散らす。

「だいぶ飲んでますね」

「馬鹿野郎、酔っちゃいねえよ」

「身体に障りますよ」

「うるせえ、偉そうに」

「差し出がましい事を言いました。すみません。それで、今日は何の用件で？」

「なんだ！その言い方は、ふざけるんじゃないぞ、大体誰のおかげで今のお前があると思ってるんだ、ああ？」

「ええ、感謝してますよ、叔父貴には」

「その感謝が足りねえって言ってるんだ、それに俺は引退したんだ。もうお前の叔父でもなんでもねえよ」

「まあまあ、そんなに苛めんで下さいよ」

「うるせえ、孤児だったお前を拾ってやったのはこの俺じゃねえか、今度はテメエがその借りを返す番じゃねえのか？」

若い女子店員がオーダーを取りに来て話は中断した。ヨシオカはアイスコーヒーだけ注文しノセは発泡酒の御代りを頼んだ。

「借金一体いくらあるんです？」

「大したこたあねえよ……」

「そんな訳ないでしょう、こないだも高山組のなんとかっていう野郎が俺に肩代わりしろってねじ込んできましたよ。こんな目立つとこで飲んでる場合じゃないでしょう」

「そうか、そりゃあ迷惑かけたな……」

「どうするんですか？」

「どうするもこうするもねえよ、だからお前に頼んでるんじゃないかねえか」

「で、いくらあるんです？」

「まあ、ざっとこれくらいかな……」

ノセが金額をいう。

「そりゃ、いくらなんでも無理だ」

「お前にとつてははした金だろ。ただでくれとは言っていないだろうが、ちよつと貸してくれって言ってるんだ」

「ちよつと貸してくれっていう金額じゃない、そんな博打の借金なんか踏みたおしゃあいいじゃないですか」

「そういう訳にはいかねえんだよ。何だ、ああ、俺の頼みが聞けねえっていうのか？」

ノセがタバコを啜える。

「おう、何してんだ、火だよ、火。見えねえのか？」

ヨシオカがポケットから金のライターを取り出しノセのタバコに火をつけた。

「なんだあ、その派手なライターは？ 一体いくらするんだ？」

ノセの問いには答えずヨシオカはライターをポケットに仕舞った。

「お前、友愛党の政治家とつるんでなんかやってるだろ？」

「そんな根も葉もない噂どこで聞いてきたんですか？」

「とぼけるなよ、ガキの誘拐はお前の仕業だろ、一体いくら稼ぎになるんだ？」

「知りませんよ」

「そんな勝手な事やりやがって、本部が知ったらなんていうだろうな？破門だけじゃあすまねえだろうな……」

先ほどの店員がアイスコーヒーと発泡酒を持ってきた。ノセがジヨッキに口をつける。

「まあ、今ここにいるから、用意できたら持ってきてくれ」

ノセがアパートの住所を書いた紙をヨシオカに渡す。

「しけた暴走族の頭やっていきがってたお前をここまでにしてやったのは俺だからな、よく考えてみるんだな」

そういうとノセは店を出て行った。

43 ゲームオーバー

人里はなれた山あいの広大な敷地に三十棟以上あるプレハブの建造物が点在している。かつては殺人集団と恐れられた宗教施設の総本部。

今は不良グループ『マザーレスチルドレン』のアジトとなっている。

敷地の中央にある建物のメンバーが会議室と呼んでいる部屋、ユキオとエミコが詰めている。

「ねえねえ、ユキオ、そろそろあいつら起きてる頃じゃないの？」
エミコがユキオにいう。

「ああ、ヤギ（金髪）に見張らせてるから、なんかあつたら言いに来るだろ」

テレビの前で胡坐をかいてゲームに夢中になっているユキオ。エミコに見向きもしないでそういった。

「いいの？あんなガンジャボケの馬鹿に任せといて。何かあつたらヒラヤマさんにヤキ入れられて半殺しにされちゃうよ」

「うるせえなあ、今いいとこなんだから、心配ならお前が様子見てこいよ」

テレビ画面ではゲームの主人公の男が街を走り回り車を破壊し一般市民を殺傷している。血しぶきをあげて倒れる人々を踏みつけて銃を持った男が疾走している。

「ユキオさあ、こんなんやって楽しい？馬鹿みたいに人殺して走り回って……、これって私達がしてることあんま変わんないじゃん、どんだけ暴力好きなんよ？」

「馬鹿！バイオレンスつていえよ。最高じゃねえかよ、ゾクゾクするぜ」

ユキオはテレビ画面から視線を逸らさずにそういった。

「それより腹が減ったな、何か食いもんねえのか？」

「なーんにもないよ。今、ヨシナリ達が町まで買出しにいったるし。それにしても遅いなあ、あいつら……」

「けっ、あいつらじゃあ、あてにならねえし。どうせ町のゲーセンで遊んで朝まで帰ってくりやしねえよ」

「だけどお……」

「普通あるだろよお、非常食とかよお。裏の棟にいつて缶詰かなんか探してこいよ」

「嫌よ！あそこ気持ち悪いもん。変な仏像とか一杯あるし、くっさいし、虫だらけだし、こないだちよつと入ったら体中痒くなって大変だったんだから」

「全く。使えねえヤツだな、お前っていうオンナは」ため息をつくユキオ。

「ヒラヤマさん、さつき出て行ったけど何処行っちゃったのかな？」

「さあ、何にも言ってかかなかったからすぐ戻るんじゃない？」

「大体さあ、子供なんてさらってどうすんのよ、あの子達どうなるんだろ？」

「外国に売り飛ばされるに決まってるんじゃないか」

「ちよつと可愛そうだね……」

「まあな……。てか、つくそー、お前とくだらねえ話してたらゲームオーバーになっちまったじゃねえか！」

ゲーム機のコントローラーを投げ捨ててユキオがどなる。

「あーあ、今日はついてねえなあ…… バングルは無くすし、飯も無い。やっぱり何か買っとけばよかったな、あー腹減った」

「ねえ、ユキオ、あのバングル随分大事にしてたけど、昔のオンナにでも買ってもらったんじゃないの？」

横に座っていたエミコが抱きついてきてユキオの首に両手をまわして耳元でささやいた。

「違う、あれは姉貴に貰ったんだ」

「へー、ユキオ、ねーちゃんとかデキてたんじゃないの？ やらしー、

キンシンソウカンって言うんだよ、そーいうの」

「ふざけるな！お前ぶつ殺すぞ！」ユキオはそう叫ぶとエミコを突き飛ばした。

「痛ってー、馬鹿。殺せるなら、殺してみろって、そんな根性も無いくせに強がんなよ馬鹿、最低男。だせーんだよ！」

エミコがくつてかかると、ユキオは馬乗りになってエミコを右の拳で殴った。

「くつそたれが、もう一度言ってみろ！」

姉貴のこと馬鹿にしゃがって、ゆるせねえこの女。

……くそつ、姉貴に心配かけて　こんなことやって、もううんざりだ！俺が悪いんだ……全部俺が。

「何度でもいつてやるよ、変態野郎！飯が無いくらいで何イライラしてんだよ、家に帰ってねーちゃんとやってな」

どす黒い感情がユキオの腹に染み出して広がってゆく。殺意。抑制が効かない衝動。

「うるせえ、アニキに犯れたっていったけど、どうせお前のほうから股開いたんだろうが！　この売女が！」

今度は左拳で殴った、エミコの顔、仰け反る。ユキオはエミコの首に手をかけた。細い首、締め上げる。

「殺して……」涙を浮かべたエミコが搾り出すようにいった。

「もうどうでもいいよ……　こんなろくでもない事やって、どうせ地獄行きなんだから……　いつそひと思いに殺してよユキオ」

意外な言葉がエミコの口からこぼれる。

「……」ユキオの手から自然と力が抜けていく。

バングル無くした……姉貴……俺は一体何やってるんだろ。こんな所で。姉貴、戻りたい　あの頃に。家族が一緒に暮らしてた頃、親父が、お袋が生きてた頃。でも……帰れるわけがない。

「すまん、悪かった……」

そういつとユキオはゆっくりと立ち上がった。

その時、ユキオの正面にある窓、その向こう、月明かり、歩いてる背の高い人影が見えた。

「アニキだ、ヒラヤマの兄貴が戻ってきた…… 何か担いでる…… 何だろ、人間みたいだな」

「え？」エミコも立ち上がって窓の外を眺める。

エミコは見た。ヒトミを肩に担いだヒラヤマが自分の部屋のある棟に入ってゆくとこらだった。

44 ヤマサキの告白

東和食堂。イライラした様子でカジが店内を歩き回っている。

「マスター達遅いな、やつぱりあいつ等に捕まっちゃったのかな……」

その時何処から発信音が聴こえてきた。

「なんだ、この音は？」

ヤマサキがコートの内ポケットから小型のノートパソコンを取り出した。どうやら発信音はこのパソコンから聴こえているようだ。

ノートパソコンを開き、キーボードを素早く操作するヤマサキ。

「ハルちゃん達、高和山にいる」

パソコンのディスプレイから目を離さずにヤマサキがいう。

「先生、どうしてそんなことがわかるんだ？ 一体何ですか、それ？」

カジがヤマサキの持っている端末機の画面を覗き込む。画面はGPS情報を表示している。マップ上に点滅する赤い点が見える。

ハルトの頭に埋め込まれたシリコンチップが非常事態に発信するGPSデータ、その信号を受信して画面の下には警告文の赤い文字が左右にスクロールしている。

「今ここにハルちゃんがいるのかよ、先生？」

「うん、苦しんでる、……殴られて頭に強い衝撃を受けたみたいだ」とりあえず……今は酷い頭痛で苦しんでるはずだ」

ヤマサキはキーボードを叩き続ける。

「何いってんだよ、先生、さっぱりわかんねえ……」

混乱した様子のカジ。

「ここは、高和山の中腹、殺人教団の施設があつた場所じゃねえか！なんでこんな所に、それに先生なんだよ、なんでこんな事ができるんだ、さっぱりわからねえ」

「送信完了。ひとまずこれで頭痛は治まるはずだ、トラウマのブロック機能は外した、これで記憶が戻るが……仕方ない、耐えてくれ」
ヤマサキがぶつぶつとつぶやく。

「カジさん、車用意できる？」

「車か。その前に説明してくれよ、これはどういうことなんだ？
しつかりしちゃって、先生まるで別人だ、いったいあんた何者なんだ？」

「すまん、カジさん。騙すつもりじゃなかったけど……」

「なんか、深い事情がありそうだな、先生とハルちゃんには」

「ああ、実は……」

ヤマサキはカジに告白する。六年前ハルトに行った手術……。

そう、ケンイチをハルトとして再生したのはこの男ヤマサキであった。

「……、なんてこった。それでポケた振りしてこの店に来て、ハルちゃんの様子見に来てたって訳か」

「私は政府の極秘プロジェクトに携わった人間だ、その事で追われている。身を隠す必要があった。しかしハルトの事は心配だった」

「わかるよ、先生……」

「ああ、エイジを再生する事、あの時の私にはそれが全てだった。
だが今となってはハルトが息子みたいなものだ」

「……でもハルちゃんにそんな過去があつたなんて、先生も大変だったな……なんて言ったらいいかわかんねえけど、息子さん残念だったな」

その時、カジの携帯電話が鳴った。

「もしもし……、お前キタニか？」

え！何だつて

わかつ

た。偶然だがちょうど今からオレも向かうつもりだった

じゃ

あな

電話を切って、ヤマサキに向き直るカジ。

「車だったな、先生！ まかしときな、それと武器もいるな」
今度はヤマサキが驚いた顔をした。

「さあ、行こうぜ、先生、高和山に！」

45 Who Killed My Mama?

意識の中、目のない女、あの化け物が現れた。

お前の母親はお前が殺したんだ　　嘘だ！　　お前は知って

るはずだ　　嘘だ！母さんは生きてる！　　忘れる訳にはいか

ないぞ、お前は人殺しだ

コロシタ、オマエガ　　嘘だ！　　ウソデハナイ

ハルトは頭を抱え倒れたままで呻き声を上げる。

電気コード　　母さんが倒れて、首のコード　　死んでる

誰が殺した　　雪が降っている　　ああ、僕が、殺した…

…金魚　　雪が降っている

殺した、母さんを殺した　　誰が　　母さんを殺した

僕が、殺した、金魚を殺した　　母さんの金魚殺した　　母さ

んに殺される

殺した、母さんを殺した　　誰が　　殺した　　僕が

母さんを殺した、そう僕が……殺した。

ソウダ、オマエガコロシタ

絶叫するハルト。過去の意識が流れ込む、受け続けた虐待の数々、雪の積もった校庭の事件、施設での生活、暴虐の日々……

ハルトの封印されていた忌まわしい記憶が今よみがえる。

僕が母さんを殺したんだった。

「大丈夫か！ ハルト！ おい！」

その時、あれだけハルトを苦しめた偏頭痛が嘘のように消えた。ハルトがゆっくりと身体を起こす。

「ハルト……」

ハルトの放つ気配、その荒涼としたたたずまいにマスターは圧倒されていた。

ハルトの目。その瞳は悲しい色をたたえている。ハルトの表情、そこにはもう今までの少年らしさはない。

全ての記憶が戻った。通常だったら受け入れる事が出来なかったかもしれない。

しかし現在置かれてる状況が奇しくもハルトの精神の崩壊を防いだといえた。

「酷く苦しんでたけど大丈夫か？」

「頭痛はおさまったよ、子供達とレイコさんを探そう」
ハルトがマスターに淡々という。

「ああ、でも……」

すっかり変わってしまったハルト、まるで感情を切り捨てたような面持ち。ぞつとした。マスターの背筋に冷たいものが走る。

ハルトの変化にマスターは戸惑いを隠しきれない。

「なあハル、いったい何が起きたんだ、ハルがまるで別人に見えるんだが……」

心配げにマスターがいう。

「心配ないよ、マスター。これが本当の僕さ」

ハルトは無表情のままそういった。

46 皆殺しのヤオ・ミン

この国の隣国であるC国は爆発的な人口増加に歯止めをかける為、三十年前より『一人っ子政策』という人口抑制政策を行っている。これにより国民は夫婦一組に対し子供は一人しか持てない。この政策によりC国は四億人の人口抑制に成功した。しかし、その一方でこの政策は多くの問題を抱えている。最大の問題は、一人っ子政策に反して生まれた二人目以降の子供、国籍も戸籍も持たない子供達の出現である。そうした子供達は戸籍が無いために何の社会保障も受けられず、学校に行くこともなく、当然真つ当な職につくこともできない。戸籍の無い子供達、それはこの世に存在を認められないこと、人間として認められないことを意味する。このような闇の子供達を人々は黒核子ヘイハイスと呼んだ。

ヤオ・ミンはC国内陸部の貧しい農村で二人目の男児として生まれた。労働力の確保として男児を望むこの村では、女児が産まれると売られるか殺されるか食べられるかのいずれかである。実際ヤオ・ミンの両親は二人の女児を儲けたが、いずれも生まれてすぐに近くの町のレストランに売られた。レストランの女主人は女児の肉を剥ぎ取り角切りにするとアオザメの背ビレと一緒に鍋で煮込んだとろみのあるスープを作って客に出した。この地方では古くから乳幼児のスープは万病を治すと云う言い伝えがあり、赤子のスープは常連客に喜ばれすぐに完売した。

ヤオ・ミンは六歳になった時に村に来た人身売買のブローカーに売られた。父親はまるで収穫した白菜を売るようにヤオ・ミンを売った。その金で父親は中古の冷蔵庫とテレビを買った。

ヤオ・ミンは近隣都市移送されるとすぐに元締めの人に舌を切られた。それは言葉によって出身地が発覚するのを隠すためであった。

ヤオ・ミンは言葉と味覚を失った。

元締めの子はこの村で買い取った子供の内、少女は手か足を切断して物乞いにした。『世の中は無慈悲な人ばかりではないと知っています。どうぞ哀れな私たちにお金をお恵みください』と書かれた紙を路上に置き少女達は全裸で街角に座らせられた。

ヤオ・ミンはしばらく物乞いの手伝いのような事をさせられたが、元締めの子はヤオ・ミンが七歳になる頃、山間部にある非法の煉瓦工場に売り飛ばした。

この闇工場には各地から人身売買や誘拐で集められた子供達が過酷な強制労働に就かされていた。ヤオ・ミンはここで一日十二時間以上、粘土掘りと掘った粘土の運搬作業に就かされた。もちろん全くの無給である。一日三回の食事は小麦粉だけで作った饅頭か蒸しパンだけでそれは餓死しない程度であり、食事時間は十五分以内とされた。労働時間以外は小さな小屋に数十人が押し込められ地面にゴザを敷いてごろ寝させられた。子供達の着衣はボロボロで厳寒の真冬も暖房は一切無かった。労働者達は工場経営者の手下である五人の男達と凶暴な番犬十匹によって常時監視され逃げ出す事は不可能であった。悲惨極まりない生活、過酷な労働の日々。仕事で少しでも気を抜くと作業が遅いと言われ監視の男からスコップで殴られた。それによって多くの子供達が死んでいった。ここで働く労働者の命の価値など無いに等しかった。

ヤオ・ミンがこの工場に来て四年が過ぎた夏、大型の台風がこの地方を襲った。集中豪雨による大規模な土石流が夜半に発生し、山間の工場はあつけなく土石にのまれた。工場は濁流に押し流され、ヤオ・ミンの小屋は崩壊した。ヤオ・ミンは暴れ狂う鉄砲水の恐怖に慄きながらも何とか逃げ出して山の斜面に這い上り難を逃れた。

夜が明けて雨は止んだ。高台から周囲を見渡すヤオ・ミンの目に映ったのは一晩にして変わり果てた風景だった。工場敷地にあった建物は跡形も無く崩壊して瓦礫と化している。数力所の瓦礫から火

災が発生し白い煙が上がっている。消火しようとする者など誰もいなかった。

しかし生存者はいた。土砂に下半身を埋もれさせた見張り役の男が助けを求めている。ヤオ・ミンは側に落ちていたつるはしを拾った。半身埋もれて身動きが取れずにいる男の側に歩いていくとヤオ・ミンは男と向き合った。

そのつるはしでオレを掘り起こしてくれ。

と口頭でだけでなく身振り手振りを含めて必死で助けを求める男。その姿をじつと無表情で見つめているヤオ・ミン。数十分が経過した。ヤオ・ミンは相変わらず何もせず立っている。

男は喋り疲れて黙り込み、立ち尽くすヤオ・ミンをただ見上げているだけだった。

オレを助けたらお前を自由にしてやる。

男が沈黙を破ってそういった。ヤオ・ミンの片足が一步動いた。

そつだ、お前は自由になるんだ。何処でも好きな所にいけるんだぞ！

男が活気づいて喋る。その様を見てヤオ・ミンが冷たい笑みを浮かべる。

こいつは馬鹿か、オレはもう自由だ。

ヤオ・ミンは頭の中でそう考えた。

ためらいなくヤオ・ミンはつるはしを振り下ろした。鉄製の先端、尖った部分が男の脳天にぐさりと突き刺さった。頭蓋骨が粉碎され、血しぶきがあがった。白い脳漿が露出し骨片と毛髪のついた肉片が辺りに飛び散った。ヤオ・ミンは言葉にならない雄たけびをあげながら何度もつるはしを男の頭部に叩き付けた。男の頭部はもう原型

をとどめていない、ただの赤黒い肉塊となった。それでもヤオ・ミンはつるはしを振り下ろし続けた。男の死体を損壊し続けるヤオ・ミンはその行為に性的な興奮を感じていた。

見張りの男を惨殺したヤオ・ミンはその後も生存者を見つけてはつるはしで殺害して回った。一緒に強制労働させられていた仲間も殺した。その数は十数人にも及んだ。

皆殺しが終わるとヤオ・ミンは山を降りた。途中の畑でトウモロコシをかじった。山村に出没するとニワトリ小屋の鶏卵をすすめた。村人に見つかると惨殺して回った。ヤオ・ミンは人語を話さぬ大量殺戮者となった。

都会に出たヤオ・ミンは犯罪組織の一員となった。そして相当数の犯罪組織が暗躍している街で冷酷な殺し屋として名を上げてゆく。積年の恨みを晴らすべくヤオ・ミンは殺しまくった。例外なく現場に残されるのはむごたらしい惨殺体。凶悪極まりないヤオ・ミンの仕業。その蛮行の限りを尽くした仕事ぶりでヤオ・ミンはマフィアのボス達からも恐れられる存在になっていった。しかしヤオ・ミンはやり過ぎた。危険すぎるヤオ・ミン。遂には組織を追われる羽目に。

ヤオ・ミンを殺せ、奴を吊るせ！

ヤオ・ミンに懸賞金が掛けられた。

47 ポートピープル

六畳程のワンルームに小さなキッチンが付いた安アパートの二階の角部屋。流し台の上にある小さな窓がこじ開けられている。

シンクは汚れ放題で投げ込まれた鍋や食器にはカビが生えていてひどい悪臭が漂っている。足元には空になった発泡酒のアルミ缶が散乱して足の踏み場も無い。

小窓から侵入したヤオ・ミンは暗闇で息を殺して立っている。手には消音装置が取り付けられた三十口径の自動拳銃が握られている。このR国製の軍用銃には極寒地における使用で部品の凍結などで動かないという事態を回避するため、どうしても構造が複雑になる安全装置の類が一切付いていない。

それは僅かな誤操作でも弾が飛び出す可能性があるのだった。しかしその危険性を差し引いても弾を込めた後とはかく引き金を引けば弾が飛び出す単純さが小気味良く、ヤオ・ミンはこの銃が気に入っていた。暗闇に目が慣れるまでの数分間、キッチンの壁にもたれじつと息をひそめて佇立するヤオ・ミン。やがて暗闇に慣れてくるとヤオ・ミンはポケットからマガジンを取り出し銃に八発の弾丸を静かに装填した。

「遅かったじゃねえか、ポートピープル！」

奥の部屋、ノセがベッドの上で上半身を起こしてキッチンに向かって言った。

「人の寝込みを襲うなんざ、やっぱりチャンコロらしいぜ」

キッチンに向かってノセは続けざまに数発発砲した。銃弾は暗闇に火柱を放ち、1Kのキッチンを仕切っているガラス引き戸を粉々に砕くと激しい音を上げた。

「出てきやがれ、ぶっ殺してやる！」

ノセは覚醒剤使用による過剰な興奮状態の中にいた。予想はして

いた事とはいえ自分を裏切り刺客を放った吉岡に対しての怒りはノセを極限まで凶暴化させていた。

ベッドから跳ね起き銃を片手にキッチンへと移動するノセ。割れて散乱したガラスがノセの足の裏に突き刺さる。しかし今は痛みを感じない、頭髪を逆立たせ野獣のように闘争本能をむき出しにしたノセの頭にはヤオ・ミンを倒す事以外余念はなかった。

狭いキッチンにヤオ・ミンの気配はない。壁のスイッチに手を伸ばしノセは明かりを付けた。天井の蛍光管がチラつきながら惨状となったキッチンを白々と照らし出す。やはりヤオ・ミンはいない。玄関のドアが開け放されている。辺りには硝煙の臭いと生ゴミの腐臭が混ざり合い立ち込めている。

「畜生、逃げやがったかチャンコロ……」

ノセは玄関ドアから上半身を出しドアノブに手をかけ表の様子を伺っている。その時ノセの背後、キッチンシンク下の収納扉が内側から開いてヤオ・ミンが姿を現した。そしてノセの背中に向かつて素早くナイフを突き立てた。ナイフはノセの肝臓を的確に貫いた。鋭い痛みを感じノセが振り返る。血走った目を見開いてノセがヤオ・ミンを睨みつける。

ヤオ・ミンも切れ長の目に酷薄な笑みを浮かべてノセの目を覗き込んでいる。「てめえ……」ノセが呻く。ヤオ・ミンがナイフを捻るように引き抜くとノセの傷口から熱い血が吹き出した。ノセが苦悶の表情を浮かべながらもヤオ・ミンに銃口を向ける。ヤオ・ミンは手に持ったナイフでノセの銃を握った手の甲を切りつけた。ノセがあまりの疼痛に言葉にならない叫び声を上げて銃を取り落とす。

「痛てえじゃねえかこの野郎……」それでもノセはヤオ・ミンに掴みかかる。ヤオ・ミンはノセの左頬を何のためらいもなく切り裂いた。ヤオ・ミンは人の顔面を切り裂く事が何よりも好きだった。ナイフの切っ先から伝わってくる薄い顔の皮膚と表情筋が裂ける感触、恐怖に慄く眼差し。ヤオ・ミンの性的感情はその徹底した加虐行為で至福の境地に達していた。ヤオ・ミンの陶醉した表情を見てよう

やくその狂気に怖気付いたノセは表に逃げようとしてヤオ・ミンに背を向けた。その場にしゃがみ込むヤオ・ミン。次の瞬間ヤオ・ミンの凶悪な刃は、ノセのアキレス腱をすっぱりと切り裂いた。絶叫しながらノセは倒れこんだ。その時、通報で駆けつける黒服隊のパトロールカーのサイレンが聞こえてくる。ヤオ・ミンは残念そうな様子でノセの後頭部に向けて至近距離で銃弾八発全てを発射した。ノセの頭蓋骨と脳漿と血液とが一緒くたになり、割れた西瓜のように辺りにそれらをまき散らした。

組織から追われたヤオ・ミンは貧しさから逃れようと国を捨てた人々に混じり小さな漁船で国を後にした。出航の夜、ヤオ・ミンは船の上から街の灯を眺めた。祖国を捨てる事に何の感慨も無かった。思い出も皆無だった。ただ生まれて今まで生きてきたというだけの国だった。殺した人間の顔を思い出そうとしたが直ぐに無駄なことだと思直した。

船内の環境は劣悪だった。乏しい水と食糧の奪い合い、死体にも齧り付く有様。海賊による略奪、襲撃にあつたりもした。数週間後、ヤオ・ミンはこの国にたどり着いた。放射能汚染により世界から見捨てられた国。世界地図の上に存在するだけのこの国に……。

48 本当の僕

「心配ないよ、マスター。これが本当の僕さ」
ハルトは無表情のままそういった。

「……」

マスターは口ごもった。確かにハルトは変わってしまった。しかし現状ではどうすることも出来そうにない。

「そうか、今は……とにかくここを出ないとな」

マスターはハルトの急激な変化に混乱していた。憑依現象が起きたかのようにハルトはまるで別人だ。だが事の真相を追求するには後回しにして、兎に角今はレイコと子供たちを探し出す事に集中しようと努めた。

マスターは金属製のドアを開いた。マスターの目に映るのは山の稜線をシルエットにして広がっている星空。真夏だというのに湿度を帯びた冷気がマスターの首筋を通り抜けた。気温の低さと澄んだ空気が標高の高さを伺わせた。辺りを見渡すと常夜灯の明かりに照らされて同じようなプレハブの建物が点在しているのが見える。

「マスター、そのナイフ僕に渡してくれない？」

マスターの背中に向かってハルトがいう。

「え？」

マスターは振り返ってハルトを見る。

「僕が持ってたほうがいい」

ハルトが素晴らしいマスターを見つめた。

「ダメだ。ナイフは渡せない」

ハルトは黙っている。しかし視線はそらさない。

「ナイフはオレが持つてる、いいな、ハルト！」

マスターは思いの外興奮の混じった強い口調になってしまい自分でも驚いた。

「わかったよ」

ハルトは不満げに短くそういうとそっぽ向いて深く息を吸い込んだ。

「この建物のうちのどれかにレイコ達も監禁されてるのか……」
不規則に建ち並ぶ大小の棟群を見ながらマスターがいった。

「さあ、別の場所に連れ去られた可能性も高いね」

「そうだな……」

「取りあえず、隣から見ていくか」

「いや、アイツから訊き出したほうがはやい」

ハルトは倒れている金髪の方に視線を向けている。

「おい、起きろ！」

マスターが金髪の体を揺さぶるが金髪は目を覚ます気配はない。

「どいてマスター」

ハルトがそういうと水の入ったバケツを持ってきた。

「そんなもんどこにあった？ハルト」

「表に置いてあった」

そういうとハルトは勢いよく金髪にバケツの水を浴びせかけた。

「うっう……畜生、お前ら……」

苦しそうに唸るような声を出して金髪の意識が戻った。

「おい！しっかりしろ」

マスターが金髪の襟首をつかんで揺さぶる。

「おい、レイコと子供たちはどこだ？」

「しらねーよ」

顔を背けて金髪が投げやりに答える。

「ふざけやがってテメー！」
マスターは勢い込んで金髪の際首を締め上げる。

ハルトはマスターの背後に回って腰に挿しているナイフを抜いた。
「おい！ ハル、なにするんだ！」

驚いたマスターが振り返る。

「だめだよ、マスター。こいつはそんなんじゃない」

そう言うとハルトは手に持ったダガーナイフでいきなり金髪の左
太腿の内側を突いた。

金髪の絶叫が響く。

「ここは防音が効いてるから仲間にも聞こえないって」

ハルトが肩をすくめ金髪に向かっていう。そしてナイフを苦しげ
に叩く金髪的首筋に近づける。

「やめる、やめてくれ……」

金髪が脂汗を飛ばしハルトに懇願する。ハルトはナイフを左手に
持ち替えて右手で傷口を親指でぐるぐるように金髪の太腿をつかむ。
のけぞり悲鳴をあげる金髪。

「ちくしょう、痛えよ……痛い。放してくれ、頼むから……」

それでもハルトは表情も変えずに尚も金髪の太腿を締め上げる。

じわじわとハルトの右手が傷口から溢れ出す鮮血に染まっていく。

「わかった、わかったから、いうからもうやめて下さい。……。こ
こにはいない、もうこのアジトにはいない！」

ハルトが頷くと金髪の恐怖でくすんだ目が忙しく瞬いた。

「じゃあ、どこにいるんだ？」

ハルトが訊いた。しかし金髪は黙ったまま答えない。ただ荒い呼
吸を繰り返している。

「答える」ハルトが右手に力を込める。激痛に金髪の顔が歪む。

「わかった、いうよ……。いうからやめて……。み、港……。岡崎埠
頭に明日船が着く。その船で外国に運ぶっていった……」

「外国に運んでどうするんだ？」

「詳しくは知らない、でも多分子供は殺して内蔵をとられる、女は外国の変態に売り飛ばされるらしい」

横で聞いているマスターの顔から血の気が引いていくのがわかる。「ここには仲間が何人いるんだ？」

「今は多分……十人くらい……」

「あいつは？サングラスのデカイやつは何処にいるんだ？」

「……ヒラヤマさんは、自分の部屋にいらっしゃると思う……。あとのメンバーは中央の建物に集まってるはずだ」

ハルトが力任せに右手を捻る。ハルトの親指がずっぽりと根元まで傷口に差し込まれ金髪の左大腿神経を直接圧迫する。

金髪の左足が解剖実験の力エルの足のように激しく痙攣を始めた。「やめてくれ！」絶叫した後、金髪はあまりの激痛で気を失った。

「まあいいか、聞きたいことは全部聞き出した」

ハルトは金髪を床に転がすと腰を上げてマスターにいった。

「ああ……」マスターは呆けたように答えた。

「じゃあ、返すよ」

ハルトはダガーナイフをマスターに差し出した。

「いや……、やっぱりハルトが持ってたほうがいいようだ」

そういうとマスターはベルトに装着していたナイフケースをハルトに投げ渡した。

「じゃあ、行こうか！少し急がないと時間がないね、マスター」

ナイフを自分の腰に装着しながらハルトがいった。

49 子供たちを返しなさい！

「まったく……何やってんだ姉貴！」

ヒトミは弟のユキオに呼びかけられたような気がして、目を開けた。

ここは一体、何処？

薄暗く殺風景な室内には天井から下げられたオイルランプの炎が揺れていた。

ヒトミは床に寝かされていて背中と尻には、ざらついたコンクリート床の感触がはつきりと感じられる。事態を把握しようとヒトミは懸命に記憶をたどったが、頭の中に靄がかかったようで何も思い出すことが出来ない。

私は何をしていたんだろう？

無理に思い出そうとすると頭の芯がキリキリと痛んだ。腕の時計を見るために身を擦ったが、どうやら両手は手枷で後ろ手に拘束されているようで自由にならなかった。体を起こそうと寝返りを打とうとしたがその途端に全身の節々がきしみ、体中の筋肉が悲鳴を上げる。その激しい痛みでヒトミの記憶が一瞬に蘇った。

そうだ！事故。車で立木に激突した後、誰がここまで運んだのか……。まさかあの男が……。ここは一体……。

児童誘拐の取材で、この事件に弟のユキオが関係してる事がわかった。そして不良グループ『マザーレスチルドレン』のアジトに単独乗り込んだが、車の前に突然現れた男を避けて立木に激突。その後の出来事は気絶して全くわからなかった。

早くユキオを探さないと。

ここはおそらく犯人達のアジトだろう。ユキオもここにいるはずだ。何としてもユキオを連れ戻したい。ユキオにまっとうな人生を歩ませたい。たった一人の家族。死んだ両親も天国できっとそう願っているに違いない。

お願い！お父さん、お母さん私に力をください。

そう祈るとヒトミは自分を奮い立たせる為、部屋のドアに向かって叫んだ。

「ユキオ！あんた居るんでしょ、いつまでもこんな馬鹿なことやってないで、早く出てきなさいよ！」

部屋のドアが出し抜けに開くとサングラスの男が入ってきた。見上げるような大男、あの時ヒトミの車に立ちはだかった男だ。予期せぬヒラヤマの出現にヒトミの脳裏に緊張が走る。

「あんたがリーダーでしょ、ユキオを出しなさいよ、いるんでしょ！」

ヒラヤマはヒトミを観ようとせず、「うるさい」独り言のようにそうつぶやくと部屋の照明のスイッチをいれた。薄暗かった部屋が蛍光管の白々とした明かりで満たされた。

石油ランプを消すとヒラヤマはヒトミの前に立った。黒く濃ゆい色のサングラス、しかしヒトミにはレンズ越しの奥で目を細めているのが見えた気がした。

「あんた、さらった子供たちをどうする気なのよ！」

「さつきからいちいちうるさい女だ。そんな事はお前に言う必要はない、それより自分の心配でもしたらどうだ」

「こんな馬鹿な事はやめて自首するのよ、子供たちを返しなさい！

心配している親の気持ちが分からないの！」

「ここに居る奴らに分かる訳ないだろ、馬鹿じゃねえのか」ヒラヤマは今度は声をあげて笑った。

「もうこんな事はやめなさい、あなたにも人の心があるでしょ」

「勝手なことを言うな、親に切り刻まれた者の気持ちがお前に分かるか！」

ヒラヤマはいきなり傍らのテーブルを蹴り上げた。その一撃で木製のラウンドテーブルは激しい音をたてて破壊され、天板部分は虚空高く飛び上がりオイルランプを破碎し天井に激突して落下した。円形天板は床に叩きつけられると廻転しながらのたうち、最後は横たわっているヒトミの背中に当たって動きを止めた。ヒラヤマの激昂と背中に受けた衝撃に耐えかねて思わずヒトミは悲鳴を上げた。「この国のシステムはとつくの昔に崩壊している、人間らしく生きるなんて愚かなことだ。強い者が弱い者を食って生きるだけだ！分かったような口はきくな」

そう言い放ちヒラヤマは、ヒトミの身体を手荒に抱き抱えると奥の部屋のベッドに運んだ。

「何をするのよ！」「ヒトミが叫ぶ。

「このまま帰すわけにはいかない、お前はここで死ぬんだ」

50 ケーキで済ますわけ？

「なんで、姉貴が……」

ヒラヤマの専有する建家の裏、閉ざされた裏窓の隙間からユキオが屋舎内を覗いている。

「え？あれってユキオの姉ちゃんなの？」背後のエミコが驚いた様子でユキオに訊く。

「ああ、間違いない」振り向かずにユキオが答える。

「どうしてヒラヤマさんに捕まってるのよ？」

「知るかよ……」

室内からヒトミの叫ぶ声。

「ユキオを連れ戻しにきたんだよ、それでヒラヤマさんに捕まってる……」

「少し黙ってる。うるせえんだよ！」振り返りエミコの言葉を遮って小声で叫ぶユキオ。

どうしてこんな所まできてんだよ、姉貴。保護者ぶりやがって、ほっといてくれよ……。

ユキオは心のなかでヒトミに毒づいた。しかし反面こここまでユキオ自分を思ってくれる姉の優しさを知って、胸中入り混じる思いに混乱していた。

遠い過去、幼い頃まだ両親が生きていた頃の楽しかった日々が脈絡もなく頭に浮かぶ。

あの頃は幸せだった。温かい家庭の中何も考えずに過ごした子供時代。優しかった両親。でも親父があんな事になって全てが狂ってしまった。あの日を境に相手にしてくれるヤツなんて誰もいなくなった。世界が歪んでしまった。学校なんてどうでも良かった。勉強なんて昔から大嫌いだった。どうせ狂った世の中なんだ、真面目に生きる事なんて馬鹿のやること。そう思った。やけを起こした。

全てが糞だった。クソみたいな世界を全部ぶち壊したかった。でも壊れてたのは俺だった。現実から逃げたかったただけだ。お袋が死んだのも俺のせいだ。それでも姉貴は俺をかばってくれた。あの頃は気付いてなかった。姉貴だって辛かったはずなのに。自分のことだけしか考えられなかった。馬鹿だった。俺にはそんな事さえわからなかった。俺は馬鹿だ。大馬鹿だ。ユキオの心、その奥からやりきれない思いが溢れ出てきた。ユキオは泣きたくなった。子供のように泣き叫びたかった。

やり直したい。もう一度あの頃に戻れるなら……。姉貴。

ヒラヤマはヒトミ抱えて隣室に消えた。隣室には窓は無くユキオ達はもうこれ以上中の様子を伺うことは出来ない。

くそおお。どうすりゃいいんだ。

「どうすんのよ？」エミコがユキオの腕を掴んで訊く。

ユキオは首を振りながら「わからない」とだけ答えた。

「このままじゃあ、ユキオの姉ちゃん殺されちゃうよ、それも残忍な方法で」

ユキオは無言のまま足元に視線を落とす。

「あいつは今までに何人も殺してるんだよ、シャブ打たれて犯されて切り刻まれるんだ。あいつは超狂ってる、本物の変態で殺人鬼だよ。人を殺す事なんて何とも思っていないんだから」

「うるせえ、どうすりゃいいんだ」

「ヒラヤマ殺して、ユキオの姉ちゃん救いだそうよ。今ならヒラヤマも私たちのこと疑ってない。きつと油断する」

「マザレスにいて、最初は楽しかったけど、子供の誘拐なんて、そんな悪いことばかりやんのもいい加減イヤになってたし。酷いや

ツなんだから、

ヒラヤマ殺したってきつと神様も許してくれるよ」

「ああ、わかった。姉貴を助けたい」

自分に言い聞かせるようにユキオはいった。

「うん、じゃあ、何とか私がアイツ呼び出すから。ユキオは武器庫から拳銃持ってきて。拳銃なら殺れるでしょ。鍵は持ってる？」

「武器庫の鍵は持ってる」

「さあ、早く時間がないわ、急いで！」

「わかった、エミコはここで見張っててくれ」

そういつとユキオは武器庫のある棟へ向かって走りだした。

ユキオの姿が闇に消えるとエミコはジーンズの後ろポケットから携帯電話を取り出した。

「ヨシナリあなた一体何してんのよ！どうせまたゲーセンでしょ？」

「ゲーキ？まじ？何処に売ってたのよ。あーもう、そんな事はどうでもいいから、早く戻ってよ！」

「面白いことになったから」

「今からユキオがヒラヤマさん殺すって」

「まじだよ、まじ。冗談じゃないって、今拳銃取りに行ってる」と「ゲーキで済ますわけ？ あはは、馬鹿じゃない？」

「いいから今直ぐ戻るのよ！」

51 ヒラヤマをやつつける

ユキオはヒラヤマの部屋の棟から数百メートル離れた建家の地下の武器庫に足を踏み入れた。四方をコンクリートで固められたその小部屋は、鉄パイプ、ゴルフクラブ、有刺鉄線が巻きつけられた金属バット、大量の五寸釘が打ち込まれた木製バット。その他諸々の本来の目的から逸脱して使用されるであろう物品が無造作に積み上げられている。並の暴走族なら威嚇用に用いるだけであろうが、それらの使い込まれた形跡は『マザーレスチルドレン』の凶悪性を如実に物語っている。見る者に彼らの抗争の血生臭い惨劇の有様をいやおうなしに連想させた。

ユキオは鍵を使い奥の部屋のドア開けて進む。扉を開けた瞬間にとオイルと火薬の強烈な匂いが鼻につく。ユキオは手探りで壁のトグルスイッチを押し下げた。

天井の照明が付くと、そこには先程の部屋とは違って変わった光景が広がる。二十畳程の部屋には武器の見本市かと思紛う程、大量の銃器が整然と並べられていた。

拳銃、ライフル、スタンガンの類は言うに及ばず、自動小銃に手榴弾、呆れたことには黒光りする対戦車ロケットランチャーまで。ここにはありとあらゆる殺人兵器が備わっていた。

ユキオは速やかに部屋の隅にあるガンロッカーを開けると目についた自動拳銃を無造作に選んだ。装弾ロッカーからマガジンを取り出すと弾丸がフルに装填されている事を確認し拳銃に装着、シャキツという金属音を響かせスライドを引くと初弾をチャンバーに送り込んだ。その瞬間ユキオの首筋にナイフが突きつけられた。

「お前からこれから戦争でも始めるつもりかよ？」

それはナイフを突きつけたままユキオの耳元で言っただけのけるハルトの静かだが威圧的な声であった。

「……」

「どうするんだ、今頃銃なんか持ち出して？」

「いや、銃の点検しているだけだ」ナイフの切っ先に目を吸い寄せられながらユキオがいった。

「嘘つけ！ 初弾は装填されて安全装置も外れてる。引き金弾いたら弾丸が飛び出す状態だ」

「……」

「一体誰を殺りにいくつもりだった？」

「くそっ、時間がないんだ行かせてくれ、たのむ」ユキオが懇願する。

「ふざけるな、銃を渡すんだ！」

身動きの取れないユキオの腕からハルトは銃を奪い取った。

「マスターこっちに来てくれ」

「おう、大丈夫だハル、他は誰も来てない、野郎だけみたいだ」

そう言いながら表で見張っていたマスターが部屋に入ってきた。

「なんだ！ ここは。兵器倉庫か！」

マスターが目を丸くしていった。

「こいつは銃を持って今から誰かを殺しに行こうとしていた。それが誰か聞き出しているところだ」

ハルトはユキオの首をつかんで強引に跪かせる。

「待ってくれ、まず教えてくれ、ヤギはどうした？」床に膝を突きながらユキオが訊く。

「ああ、あの薬中の金髪か？ 拉致部屋にころがってるぜ」マスターが応える。

「殺したのか？」

「まさか。殺しちゃいねーよ、ネンネしてるだけさ」

「そっか……」

「今度はお前が喋る番だ」銃口をユキオに突きつけながらハルトがいった。

「わかった。いうよ、ヒラヤマさんを殺しに行くところだった……」

「ヒラヤマってお前らのリーダーか？ あの黒メガネの」

「ああ、そうだ」

「なんでオメガが、リーダー撃ちに行くんだよ、お前も仲間だろうが」

ハルトは床に胡座をかいて座り込み黙ってマスターとユキオのやりとりを聞いている。銃口はユキオに向けたままだ。

「嘘じゃねえ、姉貴が、俺を連れ戻しに来た姉貴が、ヒラヤマさんに捕まったんだ」

「それで？」

「このままじゃあ、姉貴は殺されちゃう、だから俺が行かせてくれ」 たのむ

「どうする？ ハルト」

「ああ、嘘ついてる訳でもなさそうだな」ハルトが口を開く。

「俺は一刻も早くレイコと子供たちを助けにいきただけだ、こいつらの仲間割れなんて知ったことじゃない」

「そうだよな、マスター」ハルトは頷くとユキオに向き直った。

「今直ぐ車を用意しろ、そしたらお前は開放してやる、後は勝手にすればいい」

「だめだ、時間がないんだ」ユキオは泣き出しそうな顔でいった。

「調子のいいこと言うんじゃない、俺だって家族拉致られてるんだ。岡崎埠頭に急がないといけねえんだよ！」

「どの船かわかんのか？」

「それは、わからない……」マスターが目を伏せる。

「俺は知ってる、今何処に監禁されてるのかも」

「なんだって！教えるんだ、今直ぐ」マスターはユキオに掴みかかる。

「駄目だ、ヒラヤマの手中からから姉貴を救い出すまでは教えられない」

「ふざけるな！今の立場が分かってんのか、この野郎！」
マスターはユキオを殴りつけた。

「マスター、どんなに痛めつけてもこいつは多分言わないよ」

「なんだって！ ハル、お前は大体さつきから分かったような口利くけど、どうなっちまたんだ、お前、全く別人じゃねえか？」

「だから、これが本当の俺だっていったろ、マスター」

「それじゃあ、わかんないだろが！ ハル」

「マスター、この件が片付いたら必ず説明する、今はレイコさん達を救い出す事だけ考えよう」

「ああ、わかったよ……」

「よし、じゃあ、こいつの姉貴を助け出しに行こう」

「俺たちも一緒に行くのか」

「ああ、そうだよ。アイツにはやられた借りがあるでしょ、マスターも俺も」

そういうとハルトは立ち上がり、ガンロッカーから同じタイプの銃を取り出すと、慣れた手つきで弾倉を銃に装着しマスターに手渡した。

「マスターも持ってたほうがいいだろ」

「ああ、そうだな」

「安全装置は掛けてないから気をつけてね」

「あのなあ、大体お前、銃なんて使ったことあるのかよ？ やけに馴れてるけど」

「ないよ」

「ないのかよ、じゃあ、なんでそんなに手馴れてるんだ？」

「さあ。でもね、分かるんだよ、なんとなく」そう言ってハルトは銃を両手で頭上に掲げると、虚空に焦点を定める真似をした。

それを見たマスターは笑い出した。

「全くお前はわかんねえよ、俺にはさっぱりだ」

「じゃあ、リベンジだ」

「そうだな、アイツには奥歯へし折られた借りがある、きっちり返してもらおうか」

52 お前を人殺しだけにはさせねえからな！

「ユキオ、何なの？ こいつら」

ユキオがハルト達を連れて戻るとエミコはたじろぎながらそういつた。

「大丈夫だ、この人達にも手伝ってもらおう」無表情のユキオが淡々といい。

「一体どういうことなのよ、ユキオ！」

「説明してる暇はない、俺たちも忙しいんだ」マスターが横槍を入れる。

「あなたには訊いてないよ！」マスターを睨みつけるエミコ。

「いいから、やるんだ」ユキオがきっぱりといった。

「……私はどうなっても知らないよ」エミコはハルト達が持つてる銃を横目にして忌々しげにいった。

「ほら、これ」ハルトがユキオにケースに収まったダガーナイフを投げて渡す。

不意をつかれたユキオは、それをなんとか受けとった。

「……銃は？」

「駄目だ。ナイフでやるんだ」

「無理だ」

「姉ちゃん助けたいんだろが。やれよ」

「……」

「心配するな、お前がやられそうになったら助けてやるよ。お前に死なれたらこっちも困るからな」

「……」ユキオは沈黙する。

「いいか、ヒラヤマが出てきたら、俺たちが逃げ出したって報告しろ。そして隙を見て殺すんだ」

低い、抑揚のない声。だがハルトの目つきには有無を言わさせな

い力があつた。

マスターは黙って二人のやりとりを聞いていた。しかし今さらながらハルトの言動に違和感を感じずにはいれなかった。

（ハル、殺せつて……。それじゃあ、お前、ここにいるチンピラと変わんねえじゃねえか……）

店でカジさんと口論になった時、いつもハルは止めに入ったよな。争いごとの嫌いな優しいやつだった。

なのになんだ、今のハルは。

時にどす黒い感情をあらわにして、相手を畏怖させ、心服させる粗暴で好戦的な態度。蒼ざめた炎の如く危険なオーラを周囲に放っている。

どうしちまつたんだハル。こんな希望の無い国でも、お前は介護施設で真面目に働いて、いつか生き別れのお袋さん探し出して楽しませてやりたいって。

不幸な境遇なんてこれっぽっちも感じさせず、そう言ってたよな。そんな、真っ直ぐに生きてるお前に通じ合うものを感じていた。俺はなあ、そんなお前が好きだった。

なあ、ハル。どんな世の中になろうと人間として間違つたことはやったらだめなんだ。いいか、人の心を失ったら終りなんだ。

ハルよ、お前はあの頃の心を取り戻すことが出来るのか？

「ハル、何も殺さなくなつていいんじゃないのか？ 足刺すくらいでさ動けなく出来るだろ」

マスターは、小声でハルトにいった。

「駄目だ。状況はそんなに甘くないよ、マスター」

「でもなあ、ハル」

「こいつらだつていつ寝返るかわかんないだろ、確実に潰しとかないと駄目なんだ」

「ああ、それは分かるが、殺しはよくない」

「マスター、何言ってるんだ？」

冷やかか目をしてハルトは続ける。

「俺は関係ないんだよ、こいつの姉貴やマスターの家族がどうなる
うとね」

「ハル、お前　本気で言ってるのか？」

「ああ、本気さ。さっきからマスターと話しててイラつくんだ。大
体誰の為だって思ってる？」

「……」

「俺は、マスターに世話になったし、兄貴のように思ってたよ。だ
から手伝ってるんじゃないか」

「……」

「マスター、家族取り戻すんだろ？　何だってやるつもりなんだろ。
俺の言ってることは間違ってるか？」

「このヤツらのはあんな物騒な武器持ってる、人殺しなんて何とも
思っちゃいねえ、そんな奴ら相手にしてんだよ」

「マスターは言葉が無かった。その通りだ、ハルトの言葉に頭を殴
られたような気がした。」

「そうだ……。レイコと子供たちを救い出すため……。家族を失う
くらいなら俺は何だってできる。」

「レイコやりカヤユウジがない世界なんて生きていても意味が無
い。」

「ここはハルトの変化に感謝すべきじゃないのか。」

「分かったよ、ハル。お前の言うとおりだ」

ハル、俺は甘かった。それは認めるよ。俺も腹を括る、家
族を守るためなら何だってやるよ。」

「でもなあ、ハル。俺は、絶対お前を人殺しだけにはさせねえから

な!
)

C
h
a
p
t
e
r

0
6

E
N
D

その部屋の中心にはセミダブルサイズの医療用ベッドが置いてあった。

窓はなく四方の壁には血の色の塗装が施されていて、なんとも不気味な部屋である。

麝香の焚き込められた甘く粉っぽい臭いが漂っていた。

部屋の中央まで歩いてくるとヒラヤマは、抱えていたヒトミを投げ捨てるようにしてベッドに寝かせる。

ヒラヤマは、ヒトミの履いていたパンプスをとって床に捨て、ベッドに上がり強引にパンツスーツの下を脱がせた。

そして彼女の足を開くと左右の足首をそれぞれをロープで縛りベッドのフレームパイプに固定した。

「何をするのよ！」ヒトミは、ヒラヤマに抵抗の声を浴びせかけた。「黙れ」ベッドの上で暴れるヒトミの頬をヒラヤマは平手で加減なしに殴った。ヒトミの首が鈍い音を立てて激しく横に折れる。

それでもヒトミは、すぐに顔を上げ気丈に光るその眼でヒラヤマを睨みつけ続けた。彼女の唇からは血が一筋流れていた。

次にヒラヤマはヒトミの手錠を解き、必死に抗うヒトミのジャケットを無理やり脱がし、下に着ていたブラウスを剥ぎ取った。

そして足と同じように両腕をベッドのヘッド部分のパイプに縛り付ける。

ヒトミは懸命に手足をばたつかせたが、手足の縄が肌に食い込むだけであった。

今や彼女の自由は完全に奪われしまったといえた。

ヒラヤマの常軌を逸した振る舞いの前にヒトミはもうなすすべもなく、事態の深刻さに内心は震え上がっていた。

ヒトミをベッドに縛り付けたヒラヤマは部屋の隅へと移動した。

そこには木製キャビネットの古めかしいセパレートステレオセットが置いてある。

ヒラヤマはターンテーブルに乗ったままのLPレコード盤に注意深く針を落とす。

左右のスピーカーからコンガとマラカスが刻むサンバ調のリズムが流れだした。

『ローリング・ストーンズ 悪魔を憐れむ歌』

初めて会うかもしれないが

俺の名前くらいは知っているだろう

そして俺のたくらみにお前たちは戸惑うしかないだろう

全ての警官は犯罪者

全ての罪人は聖人

同じように表裏一体だ

俺をルシファーと呼べ

俺には制御が必要だぞ

その時俺はペテルブルグに来ていて

革命を起こしたんだ

俺は皇帝と大臣達を殺し

アナスタシアは俺に空しく悲願した

俺は喜んで見ていた

この世の王や女王が

勝手に創り出した神のために

百年間戦争するのを

もし俺に会ったら

礼儀をもって憐れみと贅沢でもてなしてくれ
これまでに身につけた礼儀の全てをもって

俺を手厚くもてなしてくれ

さもなければお前の魂をぶっ壊すぞ

ベイビー 俺の名前が言えるかい

ハニー 俺の名前が言えるか

一度だけ言ってやろうか

俺をルシファーと呼べ

言ってみる

ベイビー 俺の名前を

俺の名前は何だ

ヒラヤマは椅子に座り煙草に火をつけた。

「弟に会わせて」

ヒトミがベッドの上からヒラヤマの方に顔を向けて言った。

それを無視して黙って煙草を吸い続けているヒラヤマ。

「お願い、ユキオに合わせてちょうだい」

「会ってどうする？」

「悪いことは止めてもっと真っ当な人生を送るように説得するわ」

「馬鹿馬鹿しい」

ヒラヤマはあざけるように笑った。

「お前は、この街の外がどうなってるかわかるか？」

「……」

「通信社の記者の癖に知らないのか？」

「それがどうしたのよ」

「ここの外は地獄だ。いや、地獄のほうがましかな」

「あなたは見たことあるの？」

「ああ、この街で暮らしてる奴らがどんだけ幸せかわかるぜ」

「……」

「共食い。飢えた人間が人間を食ってるのさ」

「……」

54 再会

ヒラヤマの棲家の棟、その裏の雑木林。月明かりの下、四人の影。引きつった顔して立ちすくむユキオ。

「早くしろ、時間がないぞ」ハルトがユキオにいう。

ユキオは一度小さくため息をつくど覚悟を決めた様子で、ダガーナイフを腰のベルトに差した。

それを合図にハルトが動いた。無言で建家の方へ歩き出しすハルト、ユキオとエミコの腕をつかんだマスターも続く。

建家の側面を辿り、門口の様子が窺える場所で四人は立ち止まった。

「さあ、行け」

ハルトは、ユキオに向かって短くいうと、門口の方に顎をしゃくった。

ユキオはどこかふっきれた顔でハルトに頷き返すとその場を離れ門口に向かう。

ユキオを行かせるとハルトとマスターは銃を構え建物の影に身を隠した。

ユキオが入り口のドアを叩いている。ヒラヤマは中々姿を現さない。

ヒラヤマの名前を呼び、何度もドアを叩くユキオ。

反応はない。ユキオは恐ろしく長い時間を感じた。

数分が経過した。おもむろにドアが開くと中からヒラヤマが姿を現した。

「なんだ」ユキオの顔を見るとあからさまに不機嫌そうな声でヒラヤマがいう。

「見張りのヤギがやられて、あの二人に逃げられました」ユキオがいった。

「なんだ、そりゃあ」

ユキオを睨みつけるヒラヤマ。

「すみません」

「お前なにやってんだ、ああ？ まだ、そこら辺にいるんだろうが、寝てる奴ら全員たたき起して探しだせ」

「……」

「待て、お前なんで非常サイレン鳴らさなかった？」

「……」

「テメエ、何考えてやがる！」ヒラヤマが叫ぶ。

その瞬間ユキオがナイフを抜いた。素早くナイフを腰の高さに構えると顎を引いた体勢で体ごとヒラヤマの腹めがけて突っ込んだ。

ヒラヤマは身体を横に逃がすとユキオの突進をギリギリで避けた。ユキオは勢い余って室内に倒れこむ。

「しくじりやがった！」建家の影で様子を窺っていたハルトが声をあげる。

次の瞬間、ハルトは銃を構えて入り口に向かって走り出した。

「おい待て、ハル！」そういうとマスターもエミコの腕を放すとハルトの後を追った。その隙に走って逃げ出すエミコ。

ハルトが開いているドアから建家の中に飛び込む。だが室内は真っ暗で何も見えない。

「どこだ！ ヒラヤマ」ハルトが叫ぶ。次の瞬間、ハルトの身体を激しい衝撃が襲った。

暗闇から繰り出すヒラヤマの蹴りがまともにハルトの脇腹に命中したのだ。

たまらず倒れこむハルト。更に襲いかかるヒラヤマ。マスターが飛び込んでくる、ヒラヤマの背中を蹴りつける。

「見えるか！マスター」

「いや、全く見えない！」

ハルトが一旦外に出る。その時けたたましいサイレンの音が響いて敷地内の非常照明が点灯した。エミコが警報を鳴らしたのだった。辺りが明るくなった。振り返るとヒラヤマとマスターが組合ったままで表に出て来る所だった。

「マスター早く離れる！」ハルトが銃を構えて叫ぶ。

ハルトの前方のアジトの入り口に数台のバイクのヘッドライトが浮かぶ。買出しに行っていた連中がエミコの知らせで戻ってきたのだ。

更に後方では男達の叫ぶ声が聞こえてきた。アジトの建物から中で寝ていた男達がバラバラと表に飛び出してこちらに向かってくる。皆鉄パイプや金属バットで武装している。

「くそつ、マスター早くどくんだ」

ヒラヤマがマスターを立ったまま押さえ込んだ形で盾にとり、ハルトを睨みつける。

ハルトも鬼の形相でヒラヤマを睨み返す。対峙する二人。

その瞬間、ヒラヤマが何かに気付いた。

その目、いつかどこかで見た覚えが……。

「お前まさか　　」ヒラヤマが驚きの声を上げる。

その時ヒラヤマの脳裏に鮮やかに蘇る、雪の降り積もった校庭。
忘れもしないあの日。

「やっぱり間違いないねえ、お前死んだはずじゃなかったのか。お袋
殺しのケンイチ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8123o/>

マザーレスチルドレン

2011年6月16日17時55分発行